

浄土

昭和十年五月廿日 第三號郵便認可 毎月一回 二日発行
昭和二十四年四月二十八日 第三號郵便認可 毎月一回 二日発行
昭和二十四年三月一日 第三號郵便認可 毎月一回 二日発行

第二十五卷

第三号

三月号

天竺



新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき B六版・十六頁
定価十五円十八円

目次

- 1. 大慈悲の仏教
- 2. 知性を超えて
- 3. 美的情感を超えて
- 4. 本願の不思議にて
- 5. すべてを包む愛
- 6. 人生は信ずる心から
- 7. お導びきのままに

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門 B六版・三十一頁
定価二十円十八円

目次

- 1. 馬に水を飲ませるもの
- 2. 流れゆくもの
- 3. なやみとまよいのもと
- 4. すでに救われている
- 5. 信ずるところ
- 6. 仏を思う
- 7. 新しい生活
- 8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土三月号目次

表紙・扉絵 結城天童

さし絵・カット 加藤金一

意訳 光明歎徳章……………(1)

“彼岸”に思う……………大野法道(4)

彼岸随想 河をわたる……………大崎崇岳(8)

コナラクへの道……………斎藤昭俊(12)

經典解説 阿弥陀経……………戸松啓真(20)

高僧伝 富田鳳瑞……………田中菰石(14)

信仰の味……………竹中信常(16)

——信仰のあり方・その三——

聖教をひもどく……………足柄常念(17)

浄土歌壇……………岩野喜久代(23)

勸募日記……………A M(39)

創作 上人と兼実夫妻……………鶴田湛泉(30)

不可思議功德……………朝のことば……………(38)

観音様に御利益を……………支部通信……………(41)

さすかつたお話を……………寄付御芳名簿……………(27)

童心仏心……………(7)

真理の花たば……………(2)……………佐藤良智(24)

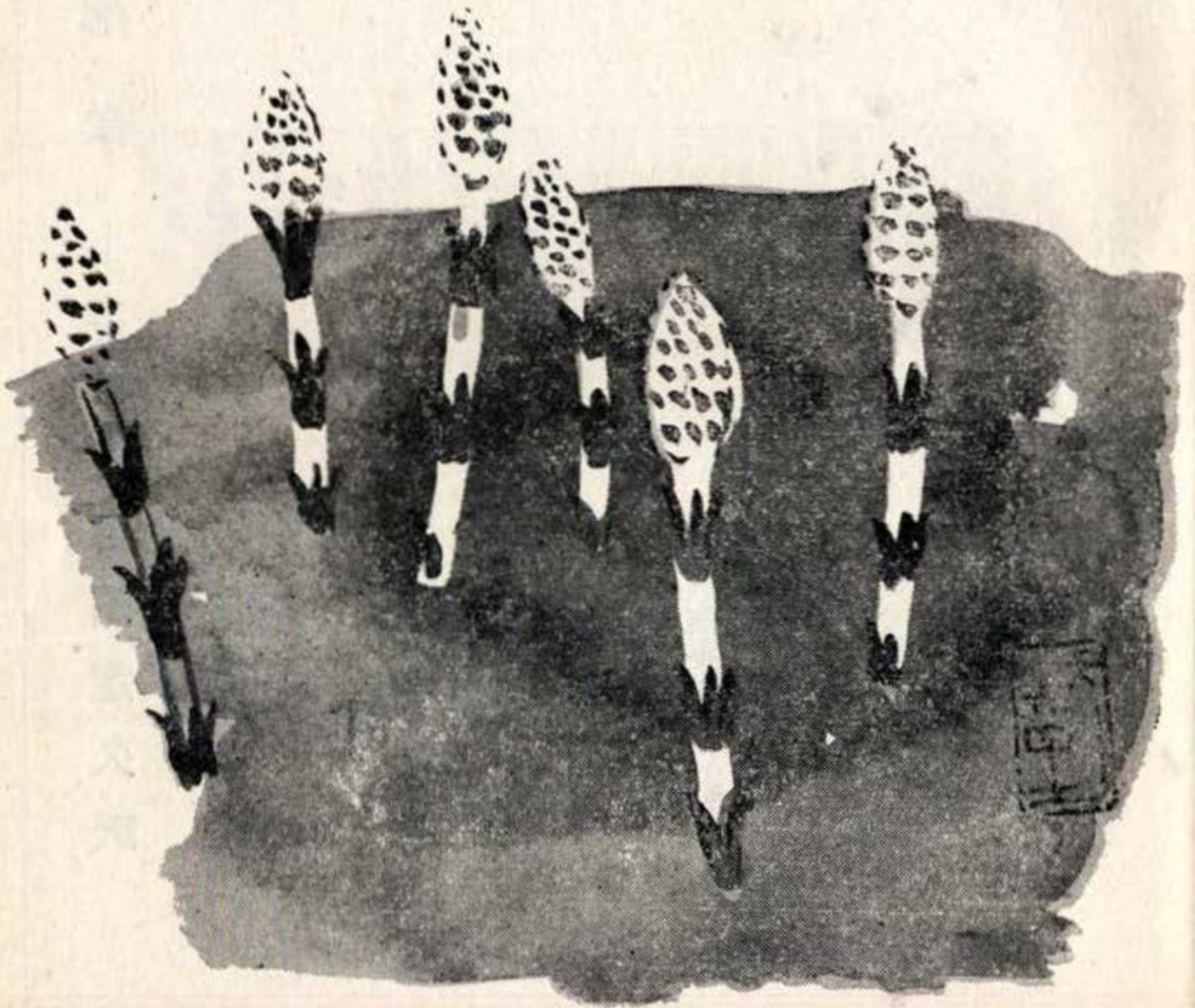
——若き女性への仏教入門——

浄土

三月号

仏は一切衆生をあはれみてよ
きをも、あしきをもわたし給へ
ども、善人をみてはよろこび、
悪人をみてはかなしみ給へる
也。よき地によき種をまかんが
ごとし。かまへて善人にしてし
かも念仏を修すべし。是を真実
に仏教にしたがふものといふ
也。

法然上人御法語



44

千仏世界を

照すなり。

四、五由旬、

十二の御名を

無量光仏むりようこうぶつ

無邊光仏

ちよろにちかつ
超日月光仏、

それこの光に

遇^ホう者は、

おさほ
貧り怒り

愚痴ぐちを消けし、

心はなごみ

さわやかに、

身も柔らぎて
すこやかに。

8

喜び 踊躍

やみがたく、
善き行も増し
すすむなり、
若しは地獄
がき畜生、
苦しみ絶えぬ
所とて。

9

この光明を
仰がんか、
悩みは忽ち
休まりて、
寿おわるや
後にみな、

救いの恵み
蒙むらん。

10

阿弥陀仏の

光明は、
輝き広く
十方の、
ほとけの国の
はてにまで、
聞えずという
ことぞなし。

11

我今それなる
光明を、
賛うるのみか
一切の、
ほとけも又々
菩薩らも、

我と同じく
賛うなり。

12

若し人ありて
勝れたる、
その光明を
昼に夜に、
只管賛え
敬わば、
弥陀の浮土に
生るなり。

13

この時の彼
菩薩など
多き聖に
たたえらる、
汝善い哉
救われて、
功德すぐれし

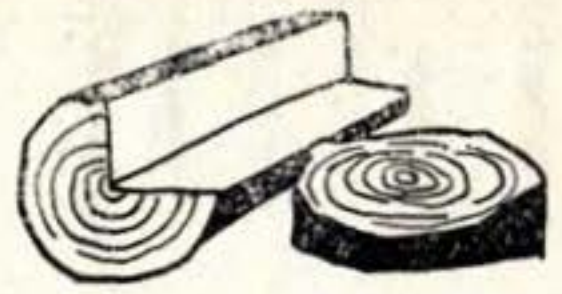
人なりと。

14

然うして後
道を得ば、
普く仏に
たたえらる
汝善い哉
覚り得て、
光明すぐれし
人なりと。

15

釈迦はここに
のたまわく、
弥陀の光明
妙なるを、
説くに幾歳
重ぬとも、
尚もて未だ
尽せじと。



“彼岸”に思う

……海は、ひがんへわたる場所……

大野 法道

—

彼岸という言葉は、日本では春分または秋分の日を、中心とする一週間をいうことになっており、この間に先祖や縁故者、知友などのお墓参りをし、家庭では仏壇に供養をささげて、冥福を念ずる行事をするのである。

けれども、彼岸を文字で見れば、非常にひろく、私達の日常の生活に、いくらでも見ることでできる事である。好ましい明日の事は、みな彼岸だからである。そして人々は、この明日のひがを追うことによって、慰められ、勇気づけられ、励まされて生きている。もし人生に明日のひががなかったら、全く味気ないものになってしまうであろう。

ところが、その明日の彼岸が問題である。それが期待したように、果して好ましいものであるかどうかは、その時になってみなければ判らない。というのが普通である。久しぶりの休日に、どこかへ出かける計画をし、前の晩から用意万端ととのえて、“明日は晴天”の天気予報まで聞いたとしても、雨だれの音に目をさます翌朝であったりする。天候ならあきらめましょうが、事によってはそうもいかないこともあり、期待はずれが落胆の、うき目を持ち来たすこともあり、場合としては好ましいどころか、取り返しつかぬ情態におかれることもあるのである。

もしそれが、人の一生をかけた明日であったなら、一体、どういうことになるであろうか。

二

一生をかけて、そこに期待する明日であってみれば、それが、その時になってみなければ判らない、では済まされない。

もし前途の光明が、ねた時に見る夢のようで、現実とは別の、宙にういた明日であったなら、それこそ、好ましい世界の実現は、その時にならねば判らないであろう。そこで、明日が宙ぶらりんにならぬように、夢を現実結びつけて、明日のために今日つとめる、という手がある。なるほどこうなれば、少しは手ごたえがあり、夢は、精進という事実のうらづけを具えて、やや確実性を持つであろう。

けれども、やはり明日の結果は、その時が来ないと判らない範囲を、出ることとはできないようである。然らば人生は、どこまで行っても、遂にこうした覚束ない世界として、終止符を打たねば、ならないものなのであろうか。

ここに一つの、不思議な道が残されている。それは、明日のために今日努める、そのバックボーンに、明日につながる今日の喜び。

があることである。因果を越えて、今の充足に落付くことである。ここでは、好ましい明日は、一つの将来の結果

ではなく、現実の喜びに融け込んでいるから、時が来なければ、判らない性質のものではないのではなからうか。

この意味で、“彼岸”という言葉は、すばらしいと思う。なぜなら、人生の期待する明日は、たゞ飄然としたものでなく、今日の此岸につながることを告げるし、また更に、此岸を渡って目的地に上陸することのできる、望みある今日であることを、想い起させるものがあるからである。好ましい世界の、彼岸につながる此岸の喜びが、ぬか喜びに終わったら大変である。それには喜びに生きる生活—自信をもって、今日を行く用意が、整えられるに相違ない。

三

むかし印度に、つぎのような譬え話がある。

七人が、賊群に追いかけて、ガンジス河の辺りへ来たので、皆が一しよに河へ飛び込んだ。

始めの人は、そのまま溺れてしまった。力が弱かったし、水泳ができなかったからだ。二人目は、沈んだけれども浮かび上った。しかしまた沈んでしまった。力が強いので、一旦浮いたけれども、泳ぎを知らなかったからだめだった。

三人目は、沈んで浮いたが前進しない。泳ぎが不充

分のためだ、四人目は、浮いてあたりを見まわし、行先きに迷うている。五人目は、浮いて前進するが、方角が不正で、彼岸へは行けそうもない。六人目は、正しい方へ前進中である。七人目は、自信と用意ができていたから、見事に彼岸に上陸し、完全に賊難から逃れることができて、大安楽を得た。

この話では、ガンジス河の彼岸となっているが、一般には、人生（此岸）を生死の大海とし、それを渡ったところが好ましい彼岸だと、仏教ではいう。

人生は、悠久なる天地であるから、広きこと大海の如くであり、そこで人々は、かれらが自ら、好ましとするものを求めて動いているが、すべてはかれらが、生れてから死ぬまでの、一生をもって参加することで成り立つから、之を生死の大海という。つまり、此岸の海は、人々が一生かけて、彼岸めざして渡る場所ということになる。

四

そこで、前に出した譬えはなしを、生死の大海を渡るところに改めて、考えてみる。

好ましい彼岸を求めて、七人が同時に海へ飛び込んだが

その結果、三人は溺れ、二人は行く先きがわからなくなつて迷い、一人は完全に彼岸に上陸し、一人はその後に続いているという。つまり海は、或る人にとっては溺れる場所であつた。また或る人には迷いの場所であつた。しかし、或る人には彼岸へ渡る場所であつた。

同じ一つの海なのに、どうしても違つた場所になるのだろうか。いうまでもなく、海をゆく、行きかたのちがいである。

先日或る新聞に、日日の暮しに事欠く家の少年が、こんな貧乏な家へ、自分を生んだと、親や姉にくつてかかつた。ということが出ていた。之は、或は発奮精神の一つの顕われかも知れないし、そうあることを願つてやまないが、遮二無二海へとびこんで、（当人は投げ込まれたと思つているであろう）目をまわした形である。

じっくり落付いて、ここ此岸が好ましい彼岸に、連がつているのに眼を開いたら、海は彼岸へわたる何よりの場所となつて、自信と用意をととのえる、愉快的行程が続けられるに違いない。そして彼岸は、まさしく自らのものとなつて、存分にその優わしさを、満喫することができるようになるであろう。

法然上人は、その自信と用意を、念仏によって整えられ

たのである。

五

自信については、

人から物を受取るのに、まだ受取らないのと、受取ったのと、どちらがよいか。私は受取ったつもりで、念仏を申している、

と。之は念仏すると、受取ったような気がすることであらう。

用意については、

念仏は、常に怠らないのが、決定往生である。故に退転なく、期待の道をふみしめよと、善導大師は申された。

と。之は念仏が生きていることであらう。

しかも、この自信と用意の底を、流れるものがあつた。

今度の生に念仏して、ご来迎にあずかることの嬉しさで、大丈夫。

と。之は明日につながる今を、知ったよろこびのことであらう、と思うのである。

幸先をよぶところ根は いみじくも

あすにつながる 今日のよろこび

(童) (心) (仏) (心)

すずめの学校

今度、一年生になるチュンちゃんが、カナリヤ君とおにっこをして、羽根をぬらしてきました。

「あらあら。また、どろんこになって。お前なんか、すずめの学校にはいれないよ。」

と、かあさんすずめがいます。

「だめじゃあないか。そんなあばれんぼうじゃあ、一年生になれるもんか。」

とうさんすずめもいます。

くる日も、くる日も、ガミガミ、ガミガミ。「お前はだめだ。」「学校へはいれないぞ。」「先生はむちを持っていて、こわいんだから。」と、かあさんすずめも、とうさんすずめも、チュンちゃんの遊びをしぼって、小さな胸にするどい矢をビシビシうちこみます。

かわいそうにチュンちゃんは、ももの木の枝で、

「いいよ、ぼく。学校なんかに行かないから。そんなこわい所に、だれが行くもんか。」

と、夕焼空を眺めて泣いていました。

すずめの学校は、そんなにこわい所なのでしょうか。(輝)

彼岸
随想

河をわたる



大崎 崇 岳

一

桜さくひとえに弥陀のひがん哉 (支考)

こころよい、春風が町に野に吹きわたる、
おひがんになりました。重い外套をぬいで春
着にかえると、心もともに軽々しくなり、一
層、働きよくなります。

さあ、長い冬ごもりからぬけ出して、今年
も、元気一杯に、仕事にはげみましょう。

おひがん。そうです。毎日の生活の中で、
私共がつい忘れがちになることを、ここで一
度ふりかえって、まがりがちな生活の道を改
めて、正しくなおしておきましょう。春と
秋、年に二回のおひがんは、み仏さまが私共

に与えて下さった、人生を反省するための機
会なのであります。

二

むづかしくいうと、

「生死を此の岸とし、涅槃(さとり)を彼
の岸となし、煩惱を中流となす。ぼさつは無
想の智慧を以って、禪定の舟船にのり、生死
の此の岸より、涅槃の彼の岸に到る」

(ほんやく名義集)

といわれています。ひがんとは彼岸、くわし
くは到彼岸、「むこう岸に行く」ことなので
あります。

わさわいと、なやみのこの岸から、み仏さ

まのおいになる、むこう岸に行く。これが
おひがんのいわれであります。

この岸とかの岸の間に、河が流れていま
す、滔々と水が流れています。歩いては渡れ
ません。しかも、その水は煩惱(まよい)と
いう大きな力を持っていて、渡ろうとする人
を押し流がしてしまいます。うっかりしてい
ると足をさらわれてしまいます。にくしみ、
いかり、むさぼり、おろかさ、そういった煩
悩の水が流れているのです。よほど用心し
て、誰かしっかりした人に助けてもらおうか、
自分自身確呼とした信念を持っていないと、
非常に危険であります。

ふとみると、何と、幸いなことに一そうの
舟がありました。これはありがたい、そう思
って、これにのろうとすると、その舟には
「禪定」と書かれてあります。「しづかな
心」「動かない信念」という意味です。舟に
のっていて、立ち騒いでは危険です。心をお
ちつけて、無念無想になっっていなければ、急
流を渡ることは出来ぬ、そう教えているので
あります。

そこで、私共は、み仏さまの教えに従っ

て、ひたすらに、み仏さまのお力を信じて、ちっとお念仏をとえ乍ら、その舟にのることに致しましょう。そうすれば、いかなる急流といえども、煩惱の河を渡って、無事に、かの岸につくことが出来るのであります。法然上人も、次のように、歌っておられます。

阿弥陀仏というより外は津の国の

なにはのこともあしかりぬべし。

三

実は、この岸も、かの岸も、その中を流れる河の流れも、禪定の舟も、みんな、みんな、私どものところの中にあるのであります。

毎日、毎日、あくせくと働き、たべて、ねて、時には、あそぶ生活は、この岸ではあります。しかし、その反面、こんなことではない。自分のことばかりにかかずらわっていないで、ひろく、世のため、人たのめに役立つこともせねばいけない。何とかして、もっと大切な、立派なことをしたいと思うことがあります。それがかの岸なのであります。ところが、時たま、そうした、美しく、正

しい心が湧いて来ても、いざそうしようとすると、色々なことに邪魔されて、思うようにやりとげることが出来ません。よい事をするということは、仲々に、勇気がいるものです。電車の中で、老人や幼なごに席をゆずるにしましても、つい、おっくうになってやめてしまふことが間々あります。よくないことだと思いつながらも、大勢の人のいきおいに押されて、自分も、いつの間にか公園の芝生の中に入ってしまうこともあります。こうしたことが、すべて、河の流れ、煩惱の力のなすわざなのであります。

私共は、本当は、いつも、正しく、清く、美わしいみ仏さまのおいになるかの岸をのぞみながら、足は、依然として、この岸にとどまって一歩もそこから脱け出られないのであります。

私共の心も、そうなのであります。誰でも、人はよいことをしたいと思っているのです。しかし、それが、仲々に出来にくいのであります。しようと思いつながら、ついつい、毎日の生活に追われて、そのまますごしてし

まうのが、私共の日常なのです。

四

そうなのです。私共の毎日は、このようにしてすごされてしまふのです。そこで、おひがんは、そうした私共を静かにふりかえってみて、正しいことをする時なのです。先程申しました、み仏さまが、私共に与えて下さった、尊いチャンスなのです。

今日ひがん菩提の種を蒔く日かな（蕪村）
ほだいのたね、いいことをしようとする心を植えつけるチャンス、これがおひがんなのです。

ですから、お彼岸、一週間を、次のような心がまえで、おすごしになるように、おすめ致します。

十八日 ほどこしの日。自分にしてほしいことを、ひろく、大勢の人々にもして上げて下さい（布施）

十九日 つつしみの日。悪いことをせず、自分の心をよくいまして下さい（持戒）

観音様に御利益を

さずかったお話

讃に曰はく、

老師遠く学びて難に遭ひ、帰らむとして済渡るに由なし。聖を憶ひ、椅の上に坐して威に憑る。化翁来り資け、別る後、すみやかにかくれぬ。儀を図して常に礼し、その役輟まず。

このお話は、今から約千三百六十年程前、聖徳太子が摂政をされていた、推古天皇（女帝）の御代、行善と云う上人が、高麗に修行に出掛けました。丁度上人の修行中、彼の地に於ては、高麗と唐との戦乱があり、高麗は唐のため滅されてしまいました。この戦乱は、上人の修行地にも及び、上人も一時戦乱をのがれるため、或、河岸までひなんしました。そして上人が対岸に渡ろうと思いましたが、橋は壊され、渡し船もなく、まったく路方に迷ってしまいました。

そこで上人は、ただ一心に観音様にお助

けを乞いました。すると突然一人の老翁が船に乗って迎えに現われ、行善上人を乗せて対岸まで渡してくれました。上人は大変感謝し、船から岸に上り老翁に厚く御礼の言葉を述べようとしますと、すでにそこには、もう老翁の姿も船も共に消えて見えません。

上人はこれは、先ほど御願した観音様が愚僧の願をお聞きとどけ下さったものにちがいないと思いました。そこで一つ御礼のしるしとして観音様の像を御造り申し上げて御供養しようと考えました。この観音様の像は、唐時代にまもなく出来上り、上人は日夜御供養申し上げました。上人はこの観音様に河岸で助けていただいたのに因みまして、河辺の法師と名づけました。

なお上人がその後、養老二年、日本に帰国の際もこの観音様の像を共に御連れ申し上げ、上人が帰国後住職しました奈良の興福寺に、おまつりして終生御供養申し上げます。このことです。誠に観音様の慈愛の御力は計り知れないものがあると云うお話です。

（Y・S記）

二十日 がまんの日。何事にもたえしのんで、不平不満をいわないで下さい（忍辱）
二十一日 お中日。この間は、お寺詣りをしたり、または、御先祖の御遺徳に感謝して一日をすごして下さい。

二十二日 はげみの日。自分の出来る限りの力を以って、努力して下さい（精進）
二十三日 おちつきの日。いつもは何やかやと心せわしいのですが、今日だけは、出来る丈け心をおちつけて、自分の心をちっと反省して下さい（禪定）

二十四日 ちえの日。私共の心におおいかぶさっている、いろいろの悪い考えをとり除いて、ありのままなる正しいまなこで、み仏さまの心をちっとみとおして下さい（智慧）

おひがんの一週間を、このような心持ちでくらす。それを、くりかえし、くりかえして行けば、私共の心は、み仏さまの心に通じ、かの岸に到ることが出来るのであります。

阿弥陀仏となふる声を梶かきにして

くるしき海をこぎわたるらん

（俊朝朝臣）

聖教をひもどく

足 柄 常 念

三月はお彼岸の月、気持ち温まりたのしい月ですが、役所や学校にゆくと、年度末と称して大変忙しい月になっています。

学校を卒えて社会に第一歩を踏みだす人たちは新しい生活に胸をふくらましていくでしょうし、入試が終って勉学に意気込んでいる人たちも多いことです。いずれにしても三月は若い人たちにとって意気旺々な、期待にもえる月であります。

三月になって、これら若い人たちに会う時に、いつも思い出すのは、宗祖上人のお言葉です。それは宗祖上人が、ふと洩された言葉で、木曾義仲が京都に乱入した日の一日だけは聖教を御覧にならなかったというお言葉です。つまり一日として聖教を見ない日とてないといいたいが、義仲が京都に押入った日だけは聖教を見なかったと申さ

れたわけです。特にその日一日だけと申されただけに、その他の四六時中は如何に読書され、真剣な勉学を積まれたかが判るわけです。

このお言葉は、勅修御伝に出ていますが、その少し前にこんな話がのっています。

ある人が宗祖上人を訪ねて、上人は浄土宗をたてられたが、どんな書物を基とされたかと質ねました、上人はそれは善導大師の疏であると申されると、その人は、上人に対してたった一冊の本で浄土宗をたてられるとは、どんなものですか、と少々ふざけたことをいいました。宗祖上人はただ笑って何んとも答えられませんでした。

その質問をした人が、歩せばよいのに、この話を他にいつて吹聴し、宗祖上人の悪

口をいいました。自分の勉強が足りなくて、何も知らない人ほど度胸がよいようです。自分が浅はかな考えしかないと、他人の考えも自分と同じ位にしかないものです。

御承知の通り、宗祖上人は一切の經典を五回も繰り返して読んでおられ、その他内外の仏書に精通されていきました。古今を通じての大学者であったわけです。だからこそ御自分の学博をひけらかすことをなさらなかったのです。

一年の計は正月にありといいますが、正月にもまして三月は、殊に若い人たちにとって新たな計画をたて覚悟をきめる時期であります。しかし月日の過ぎるに徒って、計画がその通りに進み難いものです。そんな時は、この宗祖上人のお言葉を思い出して頂きたいのです。もちろん宗祖上人の真似はできませんが、少しでも宗祖上人の御生活に近づくように努力することはできます。

もう一度申します。宗祖上人は經典も仏書も精通されたればこそ、自ら愚どもとも申され、お念仏の御信念に燃えられたのです。また勉強し努力すればする程、他人の偉さも判るというものです。

コナラクへの道(一)



斎藤 昭 俊

車掌の召使

オリッサの新首都ブバネシワールからバスで四時間、午前一回、午後一回しか出ない物凄いバスである。中腰になって入る。入るところは真うしろ。バスは三つに区分されていて先方が運転手の檻、次の檻が婦人、最後の檻が男子用、丁度檻のようなものである。正面にはおかしなデコレーションがあつて、これで四時間だから全くうんざりする。途中猿にとびかかれたり、牛に邪魔されたり、車掌は威張ったもので、お客が立って、車掌が坐っている。その車掌の召使がのつていて、これが荷の出し入れをする。コナラクは松籟の音高く、海岸に近くある。一二五五年ナラシ

ンガ。デヴァ一世がズルヤ即ち太陽神を祀つたものである。このパゴダは全部石で造られているのであるが、殆んど全部の表面に彫刻がある。その彫刻が男女の結合の種々なる姿態を、愛撫の姿態を全く幾通りにか分らない程、大小さまざまな彫刻がなされている。その他ライオンや象が少々、これらの彫刻は全くすばらしかったのであるが、今は大分風雨に壊されている。それでも偲ぶには充分である。こういうのはここともう一つカジラホにある。

リンガラージ寺

ブバネシワール、つまりオリッサの新しい首都、カルカッタから急行で十二時間位南にある。以前はカタックが首都だったのであるが、ここに移された。新しい町であるとともにここは古い町なのである。以前は寺の数が七〇〇〇カ寺あったそうだが、今は百まで残っていないだろう。その中で一番大きいのがリンガラージ寺である。これも又すべて石で大小さまざまな塔が立っている。その中でも前から四つの寺が続いているものがとても大きい。これらの中にもコナラクと同じように男女結合の姿態が彫刻されてある。堂々たるものである。ここは何といつてもこの建築のすばらしさにある。石を築き上げ、如何に接合したのだらうか。ここはヒンドゥー教の寺で、物凄く厳格をさわめている。つまりカメラのカバー、靴、カバン、バンド、一切はづさせる。つまり牛皮で出来ているからである。神に対して失礼千万、牛は神聖にして、神の使であり、絶対殺せないものだから。

リタイヤリング・ルーム

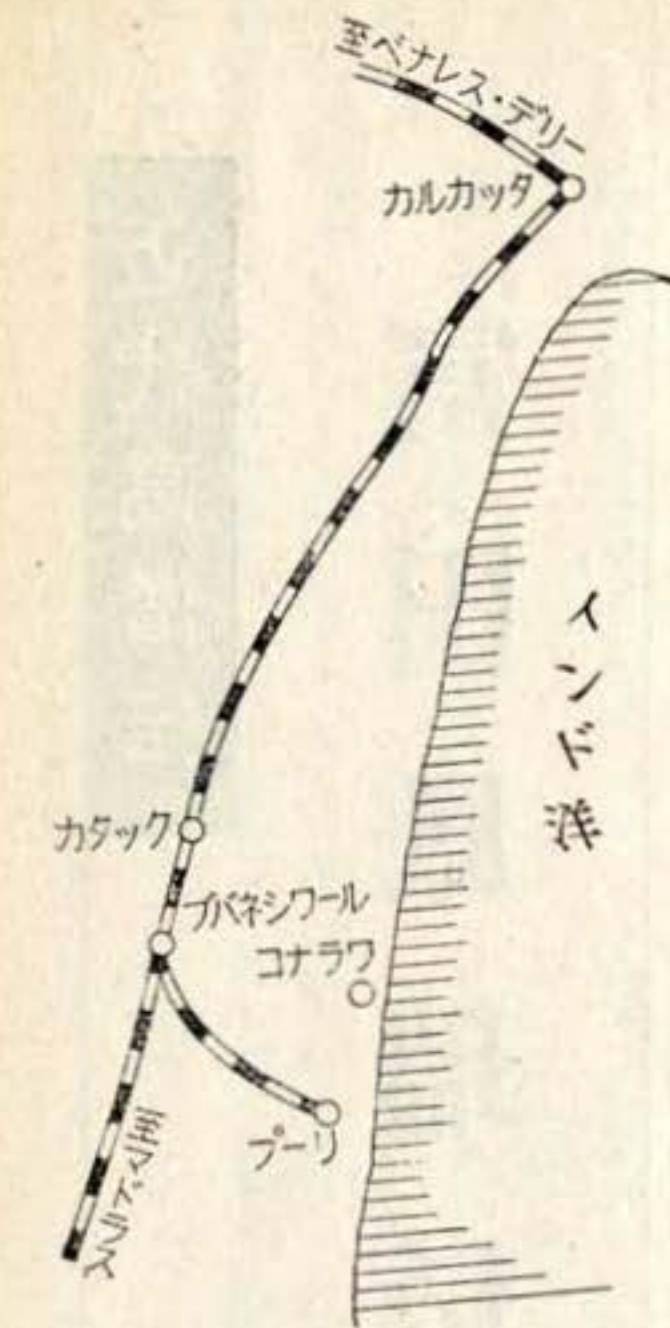
大きい駅にはリタイヤリング・ルームが作つてある。これは旅行者のためのホテル代りになる。私はブバネシワールのそれにとまった。これは一人四ルピー(三七〇円)、二人なら六ルピーということになる。ベットもいいのがあるし、鏡台、机、椅子、それに風呂ま

でついている。全くちょっとしたホテルより上等である。それで泊り賃が安い。ただ食事が出ない、しかし大体ホテルと契約があつて、食事は運んでくれる。私の泊まったところでも、ちゃんとホテルから印度食（魚カレーに御飯）一ルピー四アンナ（百円）を運んでくれた。もっとも運び賃を四アンナ（二五円）とったが、それにしても大したことはない。旅のものに少しづつ良くしてくれるのは有難いが、とにかく列車が悪いので話にならない。

バス・ガール

ペナレスは全く古い町である。ペナレスは人口も相当あって大きい町なのだが、色んな

点で遅れている。服装でも何んでもやはりカルカッタ辺りは大分いい。（ただしインドの話）ペナレスのはやはり野暮くさい。しかし大分こうして遅れているような町に、尖端を行くバス・ガールが出現した。今のところは二人、これも五八年の三月頃からの話である。何と驚くべきことである。カルカッタでもバス・ガールは見られないのであるが、インドの女性はそれこそ何もしないで、何も知らないのだから仕方がないが、話ばかりして、家の中に閉じこもりつきりなのだが、しかし段々こうして進出して来た。カルカッタから南への旅行のとき、若い恋人らしいのが、女の方の弟をつれてカルカッタから乗った。若い恋人達は体を



ふれ合せながら、片時も相手を見失ふ出来ずそれこそ人がいなかったら抱き合ったまま一昼夜を過すであろう熱をもって語らい、弟はまるつきり存在を見失ふて哀れであった。こ

んな恋人達をインドにも見ることが出来る。

インドの待合室

インドの待合室というのはお客が夜そこで寝るためにあるようなものだ。ワルタイの待合室に泊った。インド人並に、全く大変なことである。ブラット・ホームにはそれこそごろごろと転って寝ている。足の踏み場もない位に。二等の待合室にも大して広くないのに十数人ねている。机の上に一人、寝台が三つあるだけだから、あとの連中はコンクリートの上に寝ている。私もコンクリートの上になる覚悟でいたものの、丁度都合よく寝台の一人が列車にのって行ったので、私が寝台一つ占領することになった。余り長い旅行なので一晩づつ何処かへ泊まった方が体にいいだろうということで、この待合室をねらったのだが、先づは具合はよかった方だが、朝方大抵の人達は列車にのっていった。六時頃あとの連中五、六人がおこされて、もう寝てはいけないという。昨日にかわる今日のこの身の哀れさをしみじみと感ずる。インドの旅行も金があればそれこそ大名旅行なのだが。

近代高僧伝

富田鳳瑞伝

昔から、わが浄土宗の僧として、その史上に高僧徳僧或は学僧と仰がれる俊秀なる方々は相当沢山輩出されたが、念仏行者（清僧）

と仰がるる名僧は過去に於ては、彼の有名な山崎弁栄尊者にして、近代に於ては、いづれも往年遷化された三河の杉山大運僧正と我が富田鳳瑞僧正とを以て自他共に讃仰すべき近世稀なる名僧であつた。茲に余の親しく警戒に接し感化された我が富田鳳瑞僧正の小伝を記し、以て其の御高德を偲ぶ次第である。

漂渺として果しなく続く濃尾平野の一角、即ち尾張国中島郡祖父江町に、鳳瑞僧正が農民富田家の次男として呱呱の声を挙げられたのは、明治八年乙亥一月十三日の事であつ

た。師は幼少の頃より既に神童の誉高く、念仏行者としての素質を完具せられ、三才の時母上の膝上に於て西方弥陀浄土に向い合掌三

拝念仏を口誦せられたと伝う。夙に読書を好み、特に常日頃慧心僧都の往生要集を見て感動歎喜せられ又往昔の高僧伝等を耽読し其逸話などを聞いては心に名僧の倂を偲ばれた。

茲に於て師自ら一念發起せられ、同十八年三月十四日堺市了覺寺堯譽舜端上人に就き得度剃髪、名を鳳瑞と授けられた。古来「一人出家すれば九族天に生ず」と云う仏教信仰の厚い土地柄であつた丈けに、師の出家は如何ばかり御両親の歎喜せられしか思い半ばに過ぎるものが有つた。爾来只管仏道に精進刻苦勉

勵し、同三十年七月京都本山黒谷の獅子吼親定上人に就き兩脈を拝承し、同三十一年二月七日北摂勝尾山嶺に登り、当時徳本寺二階堂に隠棲せられた浄土宗一代の碩徳戒譽大順上人に師事し、専ら仏学の奥儀を研鑽しその間、上人の下に於て師の嚴格なる鉗錘を受け日夜仏道にいそしみ、朝夕の礼拝及び念仏三昧境に到り将来名僧としての貫録は既にこの時代に培われたのである。又老師戒譽上人の創設せられし十善会を最後迄薰修せられ幾多の信者に教え、その感化たるや実に偉大なるものがある。同四十三年二月摂津国三島郡東村に戒譽上人の創立に係る慧光院の建立に力を尽し、同年十月芽出度落慶老師の蓮下に常隨する事、実に二十四年間、恰も元祖大師に

二世勢親房源智上人が常隨せらるる事十八年間と、彼我正に比適するの感あり。大正十一年八月当院を三世神谷隨巖上人に譲り、自ら勝尾山徳本寺に隠棲せられ同十三年箕面麓平庵に、二河白道庵室を営み、茲に再び隠遁生活に入られ爾来遷化せらるる迄只管仏道念仏に日夜余念無く、世人その高德を讃歎喝仰して「箕面の聖者」と呼ぶ。

昭和十五年三月より

稍老衰の徴を兆じ、同十七年七月より愈々衰弱加わり病褥に在りといえども寸時たりとも口誦念仏を怠らず、常に高唱に相読せられ、八月十日頃より毎日法然上人の御出迎を受くると歎び給い、来迎引接の歡を深くせらる。



に御自分の衣類衣迄裁縫せられたと云う。又その言動誠に嚴格にして全く古諺の「持己嚴待他寛」

八月十九日午後二時頃より随待する随嚴上人の読誦する仏遺教經を聞き両手を空中に挙げ、極樂淨土の天華亂舞を悼し二十日午前二時安祥悠然として西化入寂せらる。

御法名は

妙蓮社華譽上人靈阿吉祥鳳瑞大和尚

と諱名せらる。

尚御日常生活の一端を記すに、上人常に戒律を特に厳しく守られ、日常只一人の爲め其間近傍に住せられる上人の篤信者、住山家の御手伝を受けられる事あるも、これとて極力辞退せられ三度の食事嗽ぎ洗濯は勿論の事時

に当惑るの感深く、何時も登嶺する信者に対しては誠に慇懃丁寧を極め、有難き法話等をせられるを樂みとす。又時間を守られる事、正確そのものにして起床就寢の時間を初め、凡て約束の時間は一分たりとも違わざりしと云う。余の如き輕輩凡夫が登嶺しても、諄々として仏道を解かれ、共に勤行を励み、その口誦念仏は実に高唱音吐朗々として全山に訝し、恰も極樂淨土の彷彿として現わるが如き感を深くせり。後に到り御法語を承り衷心感涙に咽んで帰るを常とせり。

嗚呼念仏に明け念仏に暮れる事、その一生

涯たるや誠に聖者の規範とするに足る。往年余が一代の碩学内藤湖南先生に謁せし時、同博士は現代の名僧は実に富田鳳瑞上人を以てその第一人者とするに充分なりと絶讃せられしは未だ耳底に残るを思い、茲に上人の御遺徳を偲ぶと共に弘く江湖の同好人に伝うる次第なり。

「田中菰石誌」

仏も昔は

祇王

仏も昔は凡夫なり

我等も終には仏なり

三身仏性具せる身を

隔つるのみこそ悲しけれ。

(今様)

信仰の味^{あじ}

— 信仰のあり方・その三 —

竹 中 信 常



—

先月、先々月と続いた私の話も、いよいよ今回で終りになるわけです。ですから、今回は一番大切な「信仰の味」——前回に申しました砂糖の甘さ——これをお話すること致しましょう。

世間では、よく、「あの人は信仰心があ

る」とか、「私はこういう信仰を持っています」などと申します。信仰というものを、何か、こう、持ったり、かかえたりするこ

りした生活を営むめたの、第一歩なのです。

との出来る「もの」のように考えられる場合が多いようです。或る意味ではそうかも知れませんが、また別の見方をすると、信仰というものは、一度自分のものにしたら、決してなくならない「もの」とは限りません。というのは、信仰は「もの」ではなくて、自分の心の在り方、幾度もくりかえして申しますように、「心のポーズ」だからであります。ですから、ポーズを変えれば、信仰も変わることがあります。また、信仰というものは、これを得ることだけが最後の目的ではない、ということもいえます。いわば、信仰というものは、人間が宗教的な生活、または自信のあるしっか

仏教の言葉に「信・解・行・証」というのがあります。信じて、これをしっかり自分の心に刻みつけ、その心を以って行為し、そして最後に、その結果の証を得るというのであります。信じっぱなしではなく、その信仰を裏づけとした実践・実行がなければならず、そしてそのように実践することによってのみ、最後には、さとの岸につくことが出来る。こういっているのです。経文にも「信は道のもと、功德の母なり」といっております。また「仏法の海は信を以て能入となす」ともいいます。砂糖も、なめっぱなしでは駄目で、甘味がわかったなら、その甘さを色々に使って、おいしい料理を作る。そのためにこ

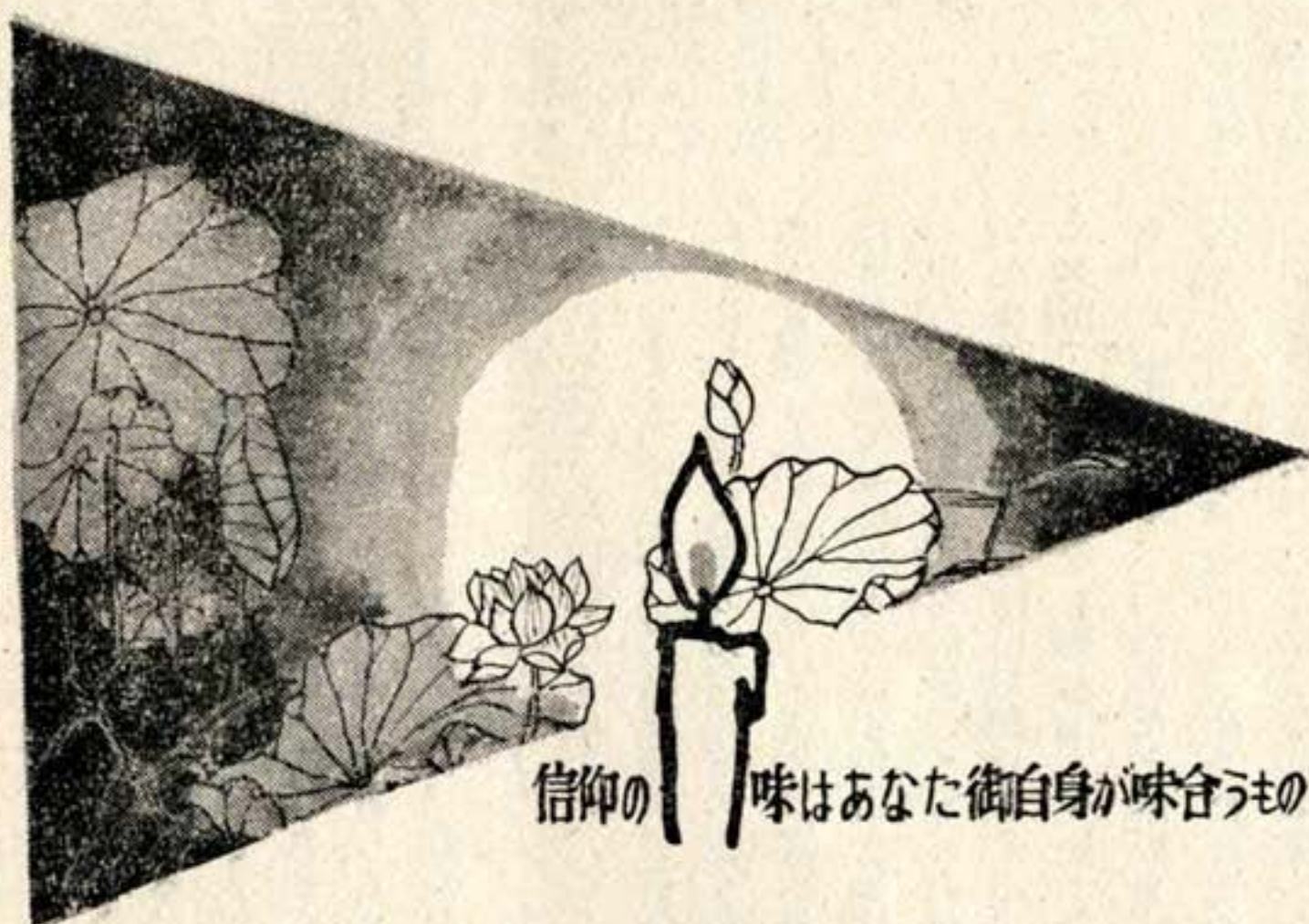
そ、砂糖をなめてみるのです。ですから、信仰も信仰しばなしではいけません。先程も申しましたように、「私は信仰を持ってゐる」というだけでは、未だ、本当の信仰ではない。その信仰をもととして、つまり、そのような心のポーズで、現実、日々の生活を暮して行く。征いまして、信仰の中からは、強い力が湧いて来るのであります。「功德の母」なのです。また、イエス・キリストも、信仰の力をバイブルの中で、こういつています。「もし、カラシダネ一粒ほどの信仰あらば、この山に、ここよりかしこに移れというとも、移らん」山をさえ動かす力があるというのであります。

うものがへばりついていると申しました。しかし、この「自分」があるうちは「本当の信仰」ではないのです。こんな話があるのです。

或る人が病氣になりました。色々と病氣

二

何故、こんな大きな力があるのでしょうか。それは「自分」ということを抜きにしているからです。前には「信ずる」ということの裏には、「自分」とい



信仰の味はあなた御自身が味合うもの

のことを氣にかけて、お医者さんに、あれこれと容態をきいたり、自分でも、寝ながら本を読んで、自分の病氣のことを研究したりしていました。しかし、一向によくなりません。薬も色々にかえてみたり、お医者さんもかえてみたりしたのですが、段々、悪くなるばかりです。まわりの者が心配して、相談した結果、名医といわれるお医者さんをたのんで参りました。その先生は、病人の枕もとに坐ると、まづ、こういいました。

「あなたは病人、私は医者。この区別をよくわきまえておいて下さい。病人は、医師を信じて、専心そのことをきけばよいのです。病人でありながら、病氣の研究をしたり、脈をはかったり、薬を選んだりするのはいけません。病人は医者ではありません。あなたは病人でいながら、病人と医者と二人分の氣をもんでいるから、よくならないのです」

病人もなるほどとうなずいて、そのとおりにしたところが、めきめき快方にむかったというのです。自分を捨てて、医師を信じ切ったのであります。

法然上人は、このような心持ちのこと

を、深心、即ち深く信ずる心であるといわれました。そしてこのところの内容は、二つの気持ちから成っています。その一つは、自分は罪惡生死の凡夫であると深く信ずる心と、二つには、念仏をとなえれば、仏は必らず救って下さると固く信ずる心、とであります。はじめの、自分を罪深く、煩惱になやむ者と信ずるのは、自分を深くふりかえり、自分というものを、とるに足りぬものとして、ふりすてることであります。そして、自分をふりすてて、素直おな気持ちになって、仏のふところの中にとびこんで行く。身も心も投げ出して行く。そういう心持ち、これが信仰の境地であります。

また、親鸞上人は、法然上人のおしえをそのまま素直にうけとって、

「ただ念仏して、弥陀に助けられ参らすべしと、よき人（法然上人）のおおせを蒙りて、信ずるよりほかに、別のしさいなきなり。念仏は、まことに浄土に生るる因にてやはべるらん。また、地獄におつべき業にてやはべるらん。総じて以って存ぜざるなり」

と申されました。こうと信じて、念仏をとなえよ。たとえ、そのために地獄におちようと構わない。ただ黙ってうけ入れる。

「私が」信ずるのではなしに、よき人（法然上人）の言葉どおりに「信じさせて頂く」これこそが、本当の信仰であります。

そこには自分というものがない。自分を計算に入れてない。地獄におちようと、極楽に生れようと、一向にかまわない、こういうのです。ですから、これは強い。自分をぬきにした時、人間の力は非常に強くなります。わが子の危急をさけるためには、母親は敢然として死地にとび込んで行きます。

「自分」というものを計算のうちに入れていては、こうした力は出て参りません。イエスが、信仰は山をも動かすといったのも、この気持ちをいったのだと思います。自分をすて切る。そして、全身全霊を相手の中に投げこむ。ここに、信仰の偉大な力が湧いて来るのであります。

三

この頃、世間では、よく、病気をよくしたいからといって信仰に入ったり、お金も

うけをするために信仰に入ったりする人がよくあるようですが、これは本当の信仰ではありません。そこには「自分」というものがあります。自分がなおりたい、自分が楽になりたい、自分が金を儲けたい。みんな「自分」がもとになっているのです。これでは、本当に全身全霊を投げ出しているとはいえません。病気がなおらなければ、やめてしまおうでしょう。そしてまた別の「信仰」をやることでしょう。これがだめならあれ。……これでは信仰でも何でもありません。デパートの特売品を買っているようなものです。こうした、うわついた、自分の利害得失を考えての信仰は、すべて迷信といってさしつかえありません。迷信と正信との区別の一つは、こんなところにもあるのであります。

真剣なものなのです。本当の信仰というものは、いいようによれば、いのちがけのものなのです。やりなおしはききません。親鸞上人のように、そのまま地獄におちてもいいという覚悟がいます。パスカルは「かけ」だといっています。投げられたサイコロは、再び戻っては参りません。一

回根りです。

ですから、信ずるということは、口では簡単ですが、実際には、非常にむずかしいものなのです。つけ焼刃でなく、自分の肉となり、血となってしまうなければならぬのですから、これは並み大抵のことではありません。

ところが、やはりこの頃の世相でよくはやる宗教の中には、お導きとか、折伏とかといって、こともなげに、人にむかって信仰に入るようにすすめるものが、沢山あります。病人があるときと、ノコノコと出かけて行ってすすめる。夫婦げんかの仲裁に入って、勧誘する。しかし、信仰というものは押し売りや、保険の勧誘とはちがいます。自分が、いのちがけて信じきって、その後にはじめていえるものなのです。真宗の蓮如上人は、

「自ら信なくして、人に信をとられよと申すは、或は物を持たずして、人に物を取らすべきという心なり」

といっておられます。いや、自分が持たないものを人にやるといってはなしに、自分が持っていて、信仰というものは、人

に与えにくいものなのです。善導大師のお言葉に

「自ら信じて、人をして信ぜしむるは、難中うたた難なり」

とありますが、まことにその通りであります。そう簡単に、人に信仰をすすめたり、信仰を与えたりすることは間ちがっているのであります。

それというのも、「信ずる」ためには、まづ自分をすてる。自分をなくさねばならぬからですし、自分をなくすということとは、自分というものを、徹底的に、はっきりと認識し、自分の限界、いわば、限りあるいのちと力とをしみじみとさることから出発しなければならぬからであります。

四

私は、三回にわたって、信仰について色々とお話して参りました。しかし、皮肉ないい方をすれば、これも、結局は、砂糖の甘さを、ただ口先だけで説明しただけのことかも知れません。しかも、自信教人信、難中転更難でありまして、私の能力としては及びのつかないことだったかも知れません。その点、深くお詫び致しますが、少く

とも、皆さんに、信仰というものは、自分自らがその中にとび込んで行かねばならぬものだということ、いのちがけの、一回限りのものだということを御了解頂けたことと思います。

それですから、これは結局、皆さんめいめいが、自分の深い決断によって入るべきで、いたづらに、人にすすめられたり、思いつきで入ったりすべきではないのであります。

つきつめて申しますならば「信仰の味」というものは、皆さんが御自分で、御自分の舌で味合って頂くほかはない、こう申し上げて私の話を終りたいと存じます。

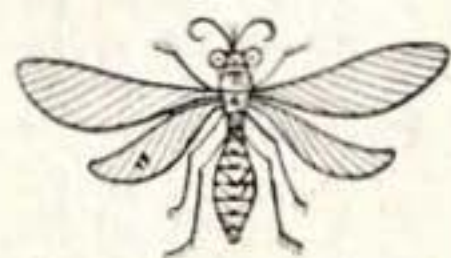
(大正大学教授)

会員各位にお願い

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 3 支部には、毎月浄土を一冊贈呈します。

阿^あ弥^み陀^だ經^{きよう}

—經典解説(一)—



咲いて、青色の花には青い光が、黄色の花には黄い光、赤色の花には赤い光、白色の花には白い光が輝き妙えなる香をただよわせている。

池のほとりには七宝で飾られた美しい桜園がある。空には珍らしい鳥が鳴き、また微風がふいて、それらはたえなる音となつて、それを聞く者には自然に念仏、念法、念僧の心を起させるのである。

次に極樂の仏をなにゆえに阿弥陀仏と申すのであろうか。

舍利弗よ、お前は心の中でどう考えているか。それは阿弥陀仏の光明は十万の世界をくまなく照しさえざるものなく、また彼の仏の寿命及びその国の人々の寿命が無量であるからである。

阿弥陀仏が仏となられてから今に至るまで、十劫という数えることも思ひはかることもできない久しい時がたっているのであるが、現に説法を続けられているのである。そして阿弥陀仏の弟子には数えきれない多くの声聞や菩薩がおられる。

また極樂国土に往生した人々は、再び生死に退かない位に入り、必ず仏となるべきべき菩薩の最高位に登るのである。

仏教經典の中には沢山の仏が出て来るが、私達に何よりも視しなれてゐる仏の名は阿弥陀仏である。印度で成立した大乘經典は九百余部もあるが、その約三分の一の經典に阿弥陀仏の名や阿弥陀仏のおられる極樂淨土のことが出てくるのである。これらの中で、専ら阿弥陀仏について説かれた三つの經典をえらんで一宗のよりどころとされたのが法然上人である。その三つの經典というのは、無量壽經、觀無量壽經、阿弥陀經で淨土三部經といわれている。淨土宗も真宗も時宗もみなこの經典によつて宗をたててゐるのである。現在これらの宗のお寺で法要の時に読まれるお經の主要部分が阿弥陀經か他二經の一部である。ではこれらの經典にはどういふことが説かれているのであろうか。先ず阿弥陀經に説かれている大要を述べたいと思う。

阿弥陀經は釈尊が舍衛城の南にある祇園精舎で長老舍利弗をはじめとする多くの弟子達と共におられた時、舍利弗を相手として、極樂の所在や何故極樂と名づけるかというところから始る。

その時、釈尊は舍利弗に向つて次のように話されてゆくのであった。

これより西の方、十萬億の仏の國を過ぎたところに世界があり、極樂と名づけ、そこには今現に阿弥陀仏が説法されておられる。その世界をなにゆえ極樂と名づけるかという、その國の人々にはなんの苦しみもなく、ただ諸々の楽しみを受けてゐるからである。

極樂の國土には、金、銀、瑠璃、瑠璃の四宝でできている欄干や飾り網や多くの樹がある。また八つの功德のある水のあふれている七宝の池には、大きな蓮華の花が

このことを聞いた者は、みな願をおこして極楽に往生したいと願うべきである。

なぜなら、極楽は前にのべたような莊嚴淨土であるばかりでなく、こうした多くの声聞や菩薩等の善き勝れた人々と俱に一処に会うことができるからである。

しかしこの世でいうような小善根小福德というようなものを修して、彼の國に往生したいと願ってもそれはできないのである。

舍利弗よ、それならば、いかにして極楽に生れることができるだろうか。

それを次に説くであろう。

もし人ありて阿彌陀仏について説かれるのを聞いて、短きは一日、長きは生涯にわたって名号即ち仏の名を一心不乱に唱えるならば、命の終る時に、阿彌陀仏が諸々の聖衆と共に來迎し、その人の前に現れるであろう。さればこそ、この世の命が終つても心は乱れずに、阿彌陀仏の極樂淨土に往生することができるのである。

私はこのような念仏の利益を見るからこそ、以上のように説くのである。それ故このことを聞く者は彼の國に生れたいと願うべきである。

阿彌陀仏の不思議な功德は、私だけが讃歎するのではなく、私と同じように六方世界のあらゆる仏が、それぞれの國に於て、誠実の言葉をもって次のように説かれてゐるのである。

「汝等衆生、まさにこの阿彌陀仏の不思議功德を稱讃するところの一切諸仏所護念經を信ぜよ。」と。

舍利弗よ、この阿彌陀經を一切諸仏所護念經といったが、それでは次にゆえにこの經を一切諸仏所護念經と名づけるのであるかそれについて語ろう。

若し人ありて、六方の諸仏が讃歎される阿彌陀仏の名号と、阿彌陀經の名を聞く者は、現世に於ては一切諸仏に護念され、來世に於ては極樂に生れて再び退くことのない菩薩の位にのぼり、正覺を得ることができからである。

このように現世護念と來世往生の利益があるから、汝等は皆釈尊の言葉と諸仏の説かれる教えを深く信じなければならぬのである。

舍利弗よ。今私（釈尊）が諸仏の不思議功德を讃歎したように、諸仏もまた私（釈尊）の不思議功德をほめたたえて次のように言われたのである。

即ち諸仏は云う。釈迦牟尼仏は説き難い法を説き、あい難い法にあわせくだされた。よくもこの五濁のけがれ多き娑婆世界に於て、悟りを得られて一切衆生のために難信の法をとかれたことである。

舍利弗よ、まことに諸仏の云うように、私は五濁の世に出でて、このむずかしい事を行つて悟りを得て仏となり、世の全ての人々のために、たやすくは信じ難いであるが、すぐれているが故にこの念仏の法を説いたのである。

このようなけがれ多き世に、念仏往生を信ぜしめんとするのは、まことにむずかしいことである。

釈尊は、大要以上のような阿彌陀經の説法をおえられたので、舍利弗をはじめ諸々の弟子達は、大いに喜び、深く信じて、釈尊に礼をなして去つて行つたのである。

以上でこの經は終つてゐるのである。

阿彌陀經は、釈尊に多年隨侍していた阿難が説述者の形で書かれてゐるが、釈尊入滅後六百年頃から大乘仏教が起り、恐らくその前後に成立した經典であろう。大乘仏

教は、より高い立場に立って仏教を再生し、釈尊の教えに復帰するのが目的であった。阿弥陀経が成立したのもこのような空気のなかであつた。それ故、この経には象徴的な理想の世界である極楽世界の有様が詳細にえがかれているが、真の目的は生死の世界に苦しみ悩む一切世間の人々に確固たる指針と精神の平和を与えんとしたのであらう。

阿弥陀経に出てくる極楽浄土の光景は、その国土の自然も桜闇も、当時の人々の欲することのできる最も貴重な四つの宝（金・銀・瑠璃・玻璃）や七つの宝（四宝のほかに磤磤・赤珠・碼瑙）でつくられている。これは望み得る最高の世界ということができる。しかも極楽の教主阿弥陀仏は、光明無量であり寿命無量なのである。そして極楽に生れた人々も寿命無量となるのである。永遠のいのちこそ古今東西いつの世どこの国でも宗教、哲学、文学の最高の課題であつたし、将来もまたそうであらう。この人間の最高の願いが実現された世界、それが極楽浄土であるが、阿弥陀経にも説くように残念なことにその世界に往くのは物理的死の後なのである。そこに「信の問

題」がおこってくる。それ故、阿弥陀経にも最後の方に釈尊が、この法は難信の法であつて、これを説くことは甚だ難しいと結んでいる。死後の世界を信じ念仏の功德を信じるということは、現代のみならず阿弥陀経成立の當時に於ても難しいことであつた。しかし現代でもそれを信じ精神の平和を得ている人もある。そこに信仰の価値を見出すこともできよう。最近の日本人の宗教関心の調査によると、「死後の世界、あの世を信じるかどうか」の問いに対し、信じないが59パーセント、信じるが20パーセント、どちらともいえないが12パーセントであるという。外国の例では、アメリカでは79パーセント、イギリスでは八割強が信じているというのは仏教者にとって注目すべきである。（末鋼恕一所長の統計数理研究所の調査による。昭和三十四年一月三十日、毎日新聞所載）

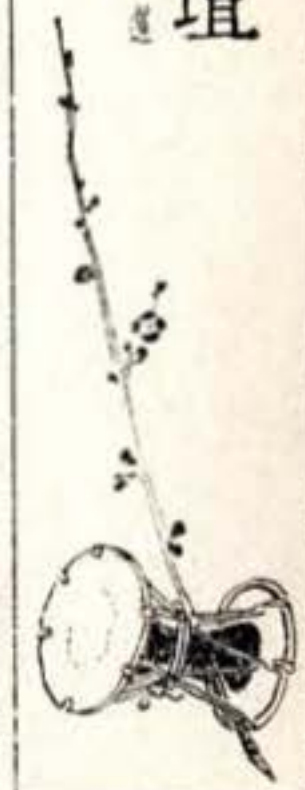
話はわきみに外れたが、この極楽へ生れるためには、どうすればよいか。阿弥陀経には、「執持名号、一心不乱」と説く。即ち一心不乱に阿弥陀仏の名を唱えれば、命終の時、心は乱れることなく極楽世界へ往かれるのである。これは未来の利益であ

るが、仏の名を唱えれば、自然に現世に於ても利益を受けると説かれている。即ち阿弥陀経は護念経とも言ふように、仏の名を唱えれば自然に諸仏の護念（おまもり）を受けると説かれている。

阿弥陀経が中国に伝来されて漢訳されたのは、西暦五世紀の初め頃で、更に漢訳経典が日本に伝つたのは恐らく奈良時代であらう。それ以後、この経は念仏の現在未来の功德がのべられている点からも、また弥陀信仰が短い説法の中に簡略にのべられていることから、写経や読誦經典として次第に尊重されてきたのである。この阿弥陀経の中に説かれている難信の法の真意をくみとり、更に無量寿経、觀無量寿経を読むならば、阿弥陀仏の信仰が確立されて必ず精神の平和を得るのであらう。法然上人が、「いけば念仏の功つもり、しなば浄土へまいりなん。とてもかくても此身には、思いわずらう事ぞなきと思ねれば死生ともにわずらいなし。」と申されたのは、その間の気持であると思う。そしてそこには思いがけない新しい力が湧いてくることであらう。

浄土歌壇

岩野喜久代 選



天

倉田 厚

人の世の一人歩きに堪へかねてわれ浄土に逃れ来しかな

評 深く思へば人間ほど不如意と

孤独にさいなまれていたるものはない。その自覚、反省が宗教へ入る一歩になるようである。故に心おごれるもの、悲しみを知らぬものは宗教心に遠いわけであろう。作者は愛する者に死別して、悲しみの中に仏道を求めようとしている。

人

西島 元甫

唐麦の殻と夕日を満載し馬車一つ行く夕ぐれ道

評 西洋的なひろびろとした原野の風景、名画を見るやうである。

千葉 千歳

一輪の俳のばらそれは悲しみのわれをあはれに思ふさまなる

斎藤 紀子

奥利根の落葉と石をのせし家背戸なる菊も枯れ枯れにして

菅沼宗四郎

雁来ぬと母に引かれて月白き夜にもありきなわれの七八つ

中谷 善次

星一つ辛もく低くすがるなり見てありがたし暗き野のはて

上代 絲子

評 やや古調で観念的な歌だが、お祝ひの歌としては、まことに明るくのびやかで、おほらかなのがよい。

世界にて最も路の美しき国の入日を胸に浴びたし

松原 昌治

穴ふさぐとたんの板に齒の立たてまづは退りぬ雨夜のねずみ

関 理一

わが法師ゆびさす方に匂やかに銀の小櫛の天にかかれる

二宮 綾子

おほなる橋一すじに灯のともる船あり大河の朝霧の中

平川 梅子

帰る家あらぬおのれのある時に似ずや気球の残る夕ぐれ

中里 史子

夜の電車スチームありて今日よりは冬ぞとふとも思ひけるかな

宮田賢太郎

にはかにも山をば出でて果てしらぬ銅路平野の黄昏に立つ

桜井鶴見子

冬の日の近きに泣きて菊花みる身にしむさまを見するものかな

能勢 房子

咲き残る朱金の菊の一枝をば剪りて瓶にす朝の食卓

牧尾有希子

かりの世はかりの世ながらさわやかに生きたし常に思ふことこれ

小宮 みち

初雪が山に來ると人の告ぐ七度降りてのち村も雪

星野 千代

散りつくす櫓の梢空澄みてきらめく星に冬らしさみる

長崎 恒子

幼き日母が教へし三つ星に夜々をしたしむ冬めぐり来て

能坂 満

田の中にすはりて二つ大いなる石をめぐりて稲の実れる

堀江真理夫

山と樹を愛する飛弾の高山の門松のなき初日の出かな

鈴木 大善

病院の長き廊下に冬の日のとどくことなく皆黙し居り

渋谷 敬子

霧立つも月かげ冴えて街の屋根あはく光りて木の間に透き見ゆ

吉末 林堂

原爆のいけにへとして愛し児が亡き数に入る泣かざらめやも

沢田 岳潤

つつがなく年の瀬越すもみほとけの冥加なればとぬかづきにけり

選者 岩野喜久代

わが園に野梅のおほしきみ仏は花の香ちかき窓にまします



眞理の花たば

——若き女性への仏教入門(三)——

佐藤良智

眞理の旗ひらめきて

花が咲く

赤く咲く

青く咲く

花が散る

春の夜空に

美わしく

花が散って青葉が芽ぐむ

青葉が眼に泌みる

光りもれば更に美わしい

みどり色濃く若人のこころはおどる

秋。

紅葉して

限りなく美わしい。

若きひとは青春を讃えよ

壮年は力のかぎり鍬をもて。

をきなと

をうなは
静かに。

× × ×

第一の旗はひらめく。ものみなうつると。

一粒の麦が、若し、うつらなかつたら芽ぐみはしない。

少女が少女のまゝでは、女人は花さかない。

花をさかせよ

あでやかに

また

清楚に。

ほゝえましく、愛らしき幼な児は生れよ。

青年となりて、希望に燃え、田を耕さん。

若き女性に熱き愛に燃えたまえ。

造られたものゝ、

絶えまなく移りゆくすがたがこれである。

造られたものが、造られた力に感謝し、移らうがまゝに。

精一杯に。力一杯に――。

これが第一のみ旗である。

第二のみ旗がひるがえっている。
地上にあるもの、ひとつとして、ひとつのみで、
あるものはない。

種子あるが故に、

芽がある。

花が咲く故に実る。

この実は、太陽あるが故に、水あるが故に、
あゝ、大地あるが故に芽ぐむのである。

人も亦同じである。

孤独の人はある。否、人は孤独であるかも知れない。しか
し、純粋に孤独の人はない。

山中深く、一人住む人があるとしても、大地があり、大
空があり、樹木があり、水があり太陽がある。たゞ一人あ
るのではない。それらと共に生きるが故に生きる。

友あり遠方より来る。また楽しからずや。

父あり、母あり、兄弟あり、夫あり、妻あり、
愛人あり、隣人あり、職場があり、社会がある。

人は一人であるのではない。何と平凡な真理であって、しかも尚、かぎりなく深い真実ではないでしょうか。

釈尊は説き給うたのであります。

諸法は無我であると。

あらゆるものには、私がない。我がないと。

あるのはみんながあるのみだ。

よりそってゆこう。温かくよりそって行こう。なにが私のもので、何が他人のものというのか。みなのものだ。なぜなら、あるのは、みんなが、あるのみだから。みんなが、みんなして生きているのだから。我は無いのだから。

赤い花も、青い花も、黄色い色も、赤いまま、青いまま、黄いまま、よりそって、温かく、生きて行こう。一つののだから。大きい我が一つだけあるのだ。無我のままの大我だ。

二本の旗についてのべた。釈尊のみ教えの特色として、三法印、即ち三つの旗じるしがあるのです。

第三の旗について述べなければならぬ。

ねはんじゃくじょう（涅槃寂靜）

弘法の聖は、

浅い夢も見ず、酔いもしない。

このみ旗の意味をそのような境地だとお歌いになった。

少年少女の夢は尊い。希望の夢だ。しかし、夢みるような、うつらうつらした人生を送る人があるなら、それは真の人生を生きる人ではない。人生はきびしい。冬の霜のようにきびしい一面もある。浅い夢をみて終ることはできない。正しい眼をひらかなければ、正しい人生を渡りきることはできない。独楽がきびしく廻るように人生はまわる。正しい、知性の眼をもたなければならぬ。新しい時代の、若い女性には特に、知性こそ必要であり、また、魅力だ。輝く知性はみちた瞳。その瞳こそ、人をひきつけづには居ないでしょう。

釈尊は恵と呼ばれた。私どものこゝろは、迷いと執着のこゝろで曇っている。憎しみ、悲しみ、むさぼり、いかり、ぐち（愚痴）、いつわり、おもねり、「数えきれない愚かさのため曇りにくもっている。離さなければならぬ」と知りつゝ、悪のこゝろは奥深く沈んでいる。ねはんとは、それらを、知性によって、また、身を修することによって、は

らしいのけた境地を言うです。

百八のぼんのうをのぞく除夜の鐘は、いんいんと、心の底になりひびく。

そこから、浅い夢は去り、酔いしれるころは覚める。めざめたころ。人生の真実にめざめ、正しく人生の旅路を行く。これがねはんの境地です。

人生にめざめ、時代にめざめ、知性に輝く瞳をひらいて、胸をはって、足音高く大地を踏む若き女性こそ、人類の燈火です。

澄んでいるこまは静かです。しかし、真剣にまわっています。

真実なものは静かだ。

人が仕事に真剣に打込んでいる時は静かだ。

たとえ、音がどのように高くとも、その境地は大地の如く静かだ。

釈尊はいみじくも申された。

ねはんは寂靜である。

と。命が命一杯に生きている境地は寂靜なのであります。

(大正大学教授)

特別寄付御芳名簿 第一回(順不同)

一、金參万円也	心行寺 鈴木在念様
一、金貳万円也	玄心寺 倉 侃茲様
一、金貳万円也	正覚寺 鈴木義宏様
一、金壹万円也	本誓寺 福田行紀様
一、金貳万円也	重願寺 大谷玄瑞様
一、金貳万四千元也	雲光院 服部覚善様
一、金貳万円也	靈巖寺 伊藤智源様
一、金貳万四千元也	正覚院 稻田稔界様
一、金貳万円也	長專院 正本実乗様
一、金壹万五千元也	法性寺 広本徹隆様
一、金壹万円也	円通寺 後藤真雄様
一、金壹万五千元也	明福寺 福井豊信様
一、金貳万円也	源法寺 北川俊嶺様
一、金壹万五千元也	仲台院 堀井恵明様
一、金五万円也	伝通院 大河内隆弘様
一、金參万円也	円勝寺 望月信道様
一、金五万円也	蓮光寺 戸田恭善様
一、金參万円也	大泉寺 谷部禪雄様
一、金貳万円也	昌清寺 服部仙順様

(不)

安定なのは人間の心である。ちょっと催眠にかけられると、功德あらたかになって、せっせと通い出す。何と迷える亡者の多きこと

よ。そもそも催眠術なるものは、一種の暗示である。とかく、神秘的に考えたがるが、あれは、ちっとも神秘的なものでなく、だれにでも、多かれすくなかれある現象である。眠りと関連があると思うのはまちがいで、眠っている状態ではなく「暗示」を受けやすい状態である。別に、催眠状態というのは、魂や心霊にも関係がない。昨夜、胸さわぎがしたとか、親が夢枕に光ったら、けさ郷里の親の死亡の電報があった。これは親の「心霊」が電報よりはやくとどいたというのである。そのような心霊があるにしても、ないにしても、その現象と催眠現象とは、なんの関係もない。なんの関係もないところに、関係をつけて、民衆の無知と、不幸と、病氣とにつけてむのが、いま流行の新興宗教である。警戒すべきことである。

(A)

(可)

愛いと、という言葉がはやる。例のべべ施風をおこしたバルドーの「可愛い悪魔」などは、同じ悪魔でも、誘惑されてみたい。

ところで、誘惑といえば、そもそもこの「可愛」という言葉自体が、誘惑を表看板としたものだったのである。論より証拠、仏典の語るところによると、仏在世の頃、スンダリー(可愛)と呼ばれる遊女がいた。仏陀の名声を嫉んだ外道がこの可愛をそそのかして、世尊のおいになる祇園精舎の内外を、シャナリシャナリと歩かせて誘惑を試みたのである。ところが世尊は一向に平気。そこで、無惨にも可愛をしめ殺して、その屍体を精舎の一隅にひそかに埋めて、改めて、大騒ぎをして、これを、いかにも世尊の仕業のように宣伝した。無論、この奸計も阿難の弁明によって直ちに氷解して、メデタシメデタシとなったのだが、気の毒だったのは、意味なく殺るされた可愛で、これこそ本当に「可愛そう」なことをしたものである。

(N)

(思)

い出というやつは……という流行歌があるらしく、街を歩いているとよくに耳に入ってくる。はてこのようにうるさい音は、何ホーン

位かな、防音防止条令に引っかかるのではないかな、と思ったりする。しかし、静かな処、騒しい処を問わず、ふと過ぎ去った小さな数々の事がらが浮んで来ることがある。それで、この思い出というものは何の為にあるのであろうかと時々軽く、哲学的にはほど遠いものを感じる事がある。人生というものが、人の意のまま思いのまま通ることならば、一時だけの思い出で消えてしまうのも早いが、歴史の流れはそれを我々に許して来れない。ならば、それを感傷としてだけ持っているのでは不用のものとなってしまう、何とか有用の方向へと運べる人は将来のある人という事が出来るようか。何事もその糸口は存在するが、それをたぐりよせることがむずかしい、早く見出すことは、それだけ生活をプラスさせることだろう。

(T)

(議)

事堂に行くと言ふサルが見られるよ、
といった大臣があった。サルは、
動物の中でも、もっとも人間にち
かい、といわれる。今更、学有り
気に、進化論をもちだすまでもなく、体の
構造といい、器官の働きといい、万物の靈
長に非常に接近している。動物の中でも、
知能が高く、手をつかうこと、心理のうご
きなど、いわば人間の部類だという説もあ
る。このサルの社会なるものは、その営み
は人間の縮図だそう。ボスの完全な支配
下にある封建体制が布かれていて、その構
造は、人間の未開社会をまのあたりにする
ようであるという。さらに興味深いことに
は、権力意識がつよく、サル同志、ボスや
先輩に対しては、つよいものには捲かれろ
式のアキラメ、卑屈と傲慢、へつらい等、
全々、人間社会におこる悲喜劇そのままを
演ずるというのである。さすれば、身近に
動ごめいている様々のすがたは、人間に似
ているサル真似でなく、サルに似た人間と
もいえようか。

(A)

(功)

なり、名をとげて大往生。と行け
ば結構だが、功もなく、名もとげ
ずに行くのが、我々凡輩の運命で
ある。

そこで、功の方はあきらめるとして、名
の方だけは何とか残こしたい。それには、
一番、人があつというようなことをするに
限る。昔だと、悪名千里に走るで、悪いこ
とをすれば石川五衛門の弟分ぐらいにはす
ぐなれた。ところが、今日では、この方も
仲々世智辛くなって、新聞の三面に、トッ
プでのようなことをするのはむずかしく
なつて来た。

つい先達は、新婚旅行の空の旅で、飛行
機を爆発させようなんて、物相なのがあら
われた。しかし、幸いに、それは失敗して
自分だけがとび降りてしまった。

アメリカでは、月ロケットにのる希望者
が案外多いとのことだが、これなど、先頃
のソ連のライカ犬に負けまいとする、人間
のはかないレヂスタンスともいえる。功も
名も、当分は犬以下というところか。

(N)

(徳)

川三百年の平和をウラからながめ
るには恰好の資料ともいうべき、
芝三縁山増上寺おたま屋に葬られ
ている徳川家代々の遺体発掘が去
年暮れから行われている。

二代將軍から始まって十四代に至るまで
の作業は本月下旬までには終るとの事であ
るが、先述の三百年の泰平といわれる世の
中にあつても、自然經濟時代が金銀の鑄造
により貨幣經濟時代に入った為の影響か、
栄華を極めた將軍家の台所の概念からは遠
い質素なものである事は新聞等で御承知の
通りですが、かと云つて、我々の生活とは
及びもつかないものである。

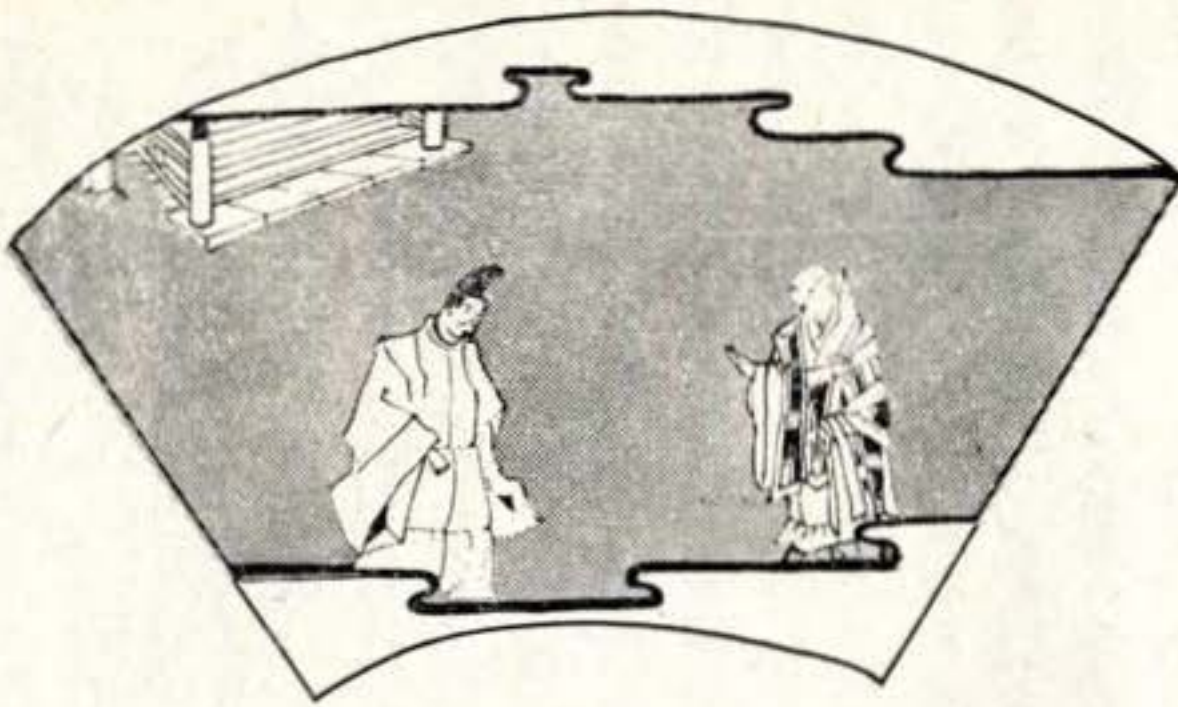
戦災前は豪壯を極めたおたま屋も、草ぼ
うぼうの中に存在し、地下に眠むる代々將
軍及びその正室たちの像想だになかった
変化を持たらした百余年間を過ぎた今日、
新しい墓地に改葬されるが、安住の地とな
り得るであろうか、とはいへ、人の世の歴
史というものはそう易々と変えられるもの
でない事が感ぜられる。

(T)

上人と兼実夫妻

鶴田湛泉

え・加藤金一



頼朝が天下の覇権を握ると、先づ政治の刷新を計るために、摂政以下の大更迭を行って、藤原兼実を廟堂の首班に擁立した。

兼実三十八才、分別盛りの春、文治二年三月十二日のことで、基通が罷めて右大臣であつた彼が摂政に就任し、後太政大臣関白をも兼ねるに至つた。

鳥羽、崇徳、近衛、後白河の四朝、関白として三十七年の長きに渡って歴事した忠通の三男として生れた兼実は、

当時の公卿の中でも最も学識深く、博く古典に通じた上、世の大勢に明るく、朝廷の古例の如きは殆んど知らざるところなく、それ故、朝廷に事ある毎に、必ず兼実に諮問されるを常とした程である。けれども、清盛の世にあつても何等権勢に媚びず、批判的な立場をとり、いつも正論を述べていたこととて、政事を中心からはとかく敬遠されていた。

丸顔で頭は大きく、身体は肥えて逞しく、鼻はまるみをおびて隆く、耳が長く口許がひきしまつていて、気むづかしやであるが、瞳に智的な輝きがあつたというから、誠に氏の長者らしい風貌であつた。

頼朝が都を遠くはなれた未開な新天地、鎌倉に幕府を開いたのは、何事にも典拠を持ち出さずには置かぬ因襲の土地から解放されるためであり、又、清盛さえもてあました叡山からの圧迫からのがれるためでもあつた。

鎌倉に動かない新政権を樹立して天下の建て直しに取りかかった頼朝は、先づ諸國に守護地頭を置いて地方の紊乱を正し、治安の維持につとめると共に、又清盛とは反し、つとめて諸寺の寺領を保護し再建に積極的な援助を与えて、仏教によって民心の安定を計らんとした。

同様に兼実も文治三年、諸宗の代表者を集めて仏教興隆のことを議している。

頼朝の推挙によって国政の掌に当ることとなつた兼実は、親幕政策をとり、頼朝の創業を助けたのはいうまでもない。

兼実が法然上人を招じて、戒を受け法門をきき初めたのは、彼が廟堂の首班となつて着々と新政策を実行しつつあった文治五年八月一日のことである。

これまでも兼実の周囲には、兄弟の天台座主慈鎮、興福寺別当信円あり、父忠通の尊崇していた護持僧仏眼、其の他、大原の本成房湛致、智詮阿闍梨等、常に出入して或は戒を受け、或は法文を聞いていた。

とりわけ仏眼との関係が密切であつたのは、仏眼は当時天下に聞えた医僧であり、日頃寸白（腹膜）を患っていた兼実は、彼から治療を受けていたことと思われる。

今又、朝野に念仏の唱導者として名の高まっていた上人を招くに至つたのは、何故であつたろうか。その頃、既に兼実は念仏の行者であつたはずである。

病弱な彼は、安元二年二十八才の時、智覚法印のすすめによつて、九月八日より一週間、一生の間、毎年往生極楽のため一万遍から五六万遍の念仏を修せんと決心していた。

のみならず、兼実が往生極楽のために念誦を日課とし初めたのは、既に十八才頃からであつた。

こうして早くから念仏行者であつた兼実が、特に上人を招くに至つたのは、何か深い動機のあつたことと思われる。

それには、前年に春秋に富む世嗣良通の悲しい死別に逢つたことを見逃すことが出来ない。

文治四年二月十九日、僅か二十二才での長男の急逝は、父に深い衝撃を与え、愛息を喪つた心の動搖に、真剣に生死の問題を問わしめるに至つたのではあるまいか。

愛息良通の一度び切れた玉の緒は、聖僧を枕辺によび護摩を梵き、いかに加持祈禱を行つても再びよみがえっては来ない。今は、百千万計も及ぶところでない。この無慈悲にまで苛酷な現実に、兼実は日記玉葉十九日の条に、

「余及び女房、この後、神心迷乱して万事覚えず」と記し、廿日以後日記を書く氣力さえ失く筆を断つていたが、數カ月後に初めて心のおちつきを取り戻したものの、やつと五月九日に至つて、この間の出来事を人にもきき、記憶をたどつて後記したため定めて誤りも多からんと記しているほどの心痛ぶりである。

今、廿日の日記を抜粹すると、

「仰も内大臣正二位兼行左近衛大将藤原良通は、その性稟柔和、志し至孝にあり、一事一言父母の命に逆かず——幼少より學に志し、和漢の典籍涉獵せざるなし、心操、才漢、政理、芸能、忠勤、至孝、この六つを兼ねて比類なし——今この喪に遭う。誠に是れ家の尽くる也。運の拙なり、惜しみても尚惜しむべし、悲しみても尚悲しむべし。言語の及ぶ所にあらず、筆端の記すべきに非ず、今に於て永く一生の希望を絶つ、偏に九品の託生を期す。——別離の悲しみ、恋慕の思い、更に堪忍すべからず。父の子を哭す古今例多し、我家寛徳通房、康和二条殿、皆なこれ希代の悲歎たりと雖も、今の哀憐に比すればかつて類となすに足らず、何の罪過あつてか、天この災を与えたるか。——其の謹父に在るべし、其の狹何ぞ予に及ばんや是則ち短寿の運、宿業早剋の故なり。愚父苟にも短命の相悟り、仏に祈り神に祈り、倦まず怠らず、而して遂に其の驗を失う。

是れ真慮の底に非ず、ただ信力の及ばざるを恨むなり。——但し万端の由緒論して益なし。一時の悲泣、言余りあり、天を仰ぎ地に伏して肝を屠り魂を摧す。何の世この恨を謝し、何れの時、この歎を休めん、こだ命を以って報とすべきか云云」

と綿々として愛息の死を悼み、つきぬ父の愛情を吐して悲歎の文橋をつづっている。

いかに慟哭すればとて、再び愛児は帰って来ない。

人生の余りの苛酷さに戦慄し、神仏にさえ懷疑的となり、身をさいなみ心傷つき、一切が空無のように思われ、生きる希望さえ粉碎され、悲歎と寂寥のどん底につき落されたのであった。

人間の生命は、一つの夢であると思われる深刻な現実のこの悲痛をどう堪えて行くべきか。兼実夫妻は、上人にすがりついて、真剣に解決法を求めたことは想像される。

上人の答えによって、浄土の法門をきくことによって、兼実は、この苦しい現実を生きぬくまでの救いを得るほどに、新たな回心を経験したのではあるまいか。そのよろこびが、兼実をして上人の帰依者となり、唯一の外護者となるに至らしめたのではあるまいか。

更に思うに、為政者としての兼実の願求していたところのものは、正しい善良の意志で行われる政事であった。

ところで、清盛在世時代は、清盛一個人の考えによって、善良でない彼の意欲によって、一切の政治経済が一般民衆の不幸をかえり見ず、勝手な私利の方向へどれだけまげられて行ったことか、日記玉葉を見れば、それは対して兼実が、いかに不満と憂憤を抱いていたかが明瞭である。

こうした希念を持つ兼実が、上人から如来の大悲本願力の広大さをきいて、どんなに奮い立ったことか。

真剣にあの世を願う心が、それによって現実のこの人間世界に処して行こうとする烈しい気魄が生れて来るものである、

仏教の目指す現実世界の理想の様相として、浄土三部経中、大無量寿経の下巻に

「天下和順し、日月清明なり、風雨時を以ってして、災勸おこらず、国豊かに民安じ、兵才用いることなく、徳を崇め仁を興して務めて礼讃を修す」

とあるが、これは実に浄土を、現実反映さすところのものである。

まことに人々協和して天災起らず、享け得た人生の歓びを感受して、人間の優しさを磨き務め、怠りない平和の世界の出現に仏道の成就がある。

保元以来天下安からず、加うるに源平の戦乱の後を受けて、乱を鎮め民心を安定せしめて治を致すことが急務であった当時であるだけ、ここに兼実としても、上人の教えから、政事をとる上に於ても、大きな示唆を受けることになったと思われる。

上人の教えは、単に往生極楽のためのみの念仏ではなかったはづである。

如来の大悲の尖被を痛感することによって、この世をよろこんで生きぬく道が示されていたのである。

ともあれ政事をとることも、兼実としては、アミダ如来へのおんみやづかえ、佛業成就の一分の役立をさせてもらいたいとの決意に燃えていたに相違ない。

やがて、兼実と上人との間には、法流水魚の親しみ、交りというか、肝胆相照らす親密な師弟の交誼が初まって行ったのであった。

三

兼実の上人への尊崇ぶりは、まるで仏弟子が、世尊に対するようにまでなっていた

或日、月輪殿（東福寺の東方にあった）へ参られた時のことである。

「只今、法然上人、渡られました」

ときくと、いつでも腰底く迎える兼実は、自ら回廊まで出迎えて来たが、上人の姿を眠めると、どう思ったのか跣足になって階下へ走るようにして下りると、地に平伏して仰いで迎えようとした。

兼実の後に従っていた聖覚法印と三井の大納言覚心の二人は、

「何事ぞ」

と驚きながら、兼実の跡を追うようにして大急ぎで階下へ下りると、兼実にならって地に伏せて迎えたのであった。

兼実は関白という頭職に在りながら、権勢を誇らず、恭敬の心から信順な弟子の礼を取っていたのであったが、上人に捧げた崇敬の程が偲ばれる。

「お迎え有り難く存じまする」

上人は兼実の唐突な態度に面くらわれた容子であったが、決して卑屈にならず自然な態度で、ゆるやかな歩を進められた。

上人は、みなれない覚心僧都に親しそうな一瞥を与えると、しばし不審し（いふ）そうに見守っていた。

聖覚は、上人の態度に気付くと、

「あれは、大納言僧都に在します」

と紹介した。

「覚心でございます」

僧都は、敬いの態度を現わして、己が名を告げた。

長い廊を渡って奥のま新しい別棟に導くと、暫しの休息を願った。この一棟は、上人の休息所として、兼実の心づくしによって特に建てられたものであった。

兼実がこの月輪殿を新築した時のこと、宏壮且優雅な寢殿造りの邸宅の一隅に、異様な別棟を一つ建てさせようとした。

「殿下の御所を多く拝見いたしましたか、かようなお邸はまだ存じませぬ」

普請奉行の三位範季は、何のために用いる所かといふかつて訊いた。

「さようであろうが、少し思うところある故に、とまかく急いでくれ」

と竣工を急がせた。

出来上って見ると、それは上人の控えの間であることが分った。既に上人は老令であつたので、一先づここで休息を願って疲れをいやした後、対面することにしていたのであった。

新しく清々しい木の香は、上人を思ふ兼実のゆかしい心が匂っているようであった。ここの月輪殿では、諸宗の僧と会することも屢々であった。

或日、たまたま訪れていた叡山の僧が、

「貴房（あなた）が、浄土宗をお立てになったのは、何れの文に依られたのでございますか」

と無遠慮に上人に訊いた。

「善導大師の疏の文によりました」

卒直簡単な答えに、その僧は重ねて、

「苟も一宗の義を立てる程のことに、ただそれだけの一文に依つていいものでしょうか」

深遠な理論を根拠としないことを詰るような語調で詰めよって来た。

上人は、ただ微笑して後は一語も答えられない。

学徳一世に並ぶものない法然上人を完全にやりこめたと独りよることんで山に帰ると、早速と東塔東谷の宝地房証真法印にこのことを語った。

この法印は、詩の人、地藏菩薩の化身（生れ変り）とまで尊崇していたほどの名僧である。

「自分の問いに対して、法然房も、何の返答もできなかった」とさも特意げに告げる態度に、法印はこの僧の無智をあわれむかのように、

「法然房が、何事もいわれなかったのは、答うるに足らずと思われたからでござろう」

「さようであろうか」

自尊心が強く慢心していた僧は、法印の言葉が不満らしかった。

「されば、彼の人は天台宗の奥義を究めている上に、諸宗に渡ってあまねく通じて智慧第一の房と称せられている程である。返答ができないで一言もいわなかったのだと思うようではならぬ」

若い頃叡山で学問修行中は親しく、かつて法門を談じ合ったことも屢々あって、上人の人柄をよく知り畏敬していた法印は、語るに足らずと相手にされなかったのを知らず、自分の無智を悟らないで

いる彼の思い上った偏見をきびしくいさめたのであった。

四、

日頃至って頑建であられた上人も、寧日のない念仏の勸化に近來健康を害されて、建久九年の正月を迎えると、いささかの病に褥に親しまれる日が多くなった。

この頃、上人は日頃の日課念仏の功を積まれて三昧発得され、面のあたり極楽浄土の莊嚴、並に観音勢至の菩薩等、種々の瑞相奇跡を明らかに見られた。

病状は回復に向わぬままに四月に入ると篤くなり、上人もよほど大患と思われたのか万一を考えられて、八日には病褥にあって歿後の遺誠文を認められた。

二カ条よりなる遺言は懇切を極めたもので、歿後に於て弟子達の諍論をきびしく誡め、ただ念仏にはげむべきことをすすめ、年来の入室の弟子である信空、感西等の七人に、吉水の庵室のささやかな住房、雑舎、聖教等の分配法を認めたものであった。

上人も齡早や六十六才に達せられたので、重らせ給わばいかにせんと憂慮した兼実は、唐薬を贈り届けたり、真心の慰問をささげ、朝も夕も使を出して見舞わしめた。

各地にいる弟子達も病床に馳せ参じ、津戸三郎も、関東から急使を立てて、病状を見舞ってきた。

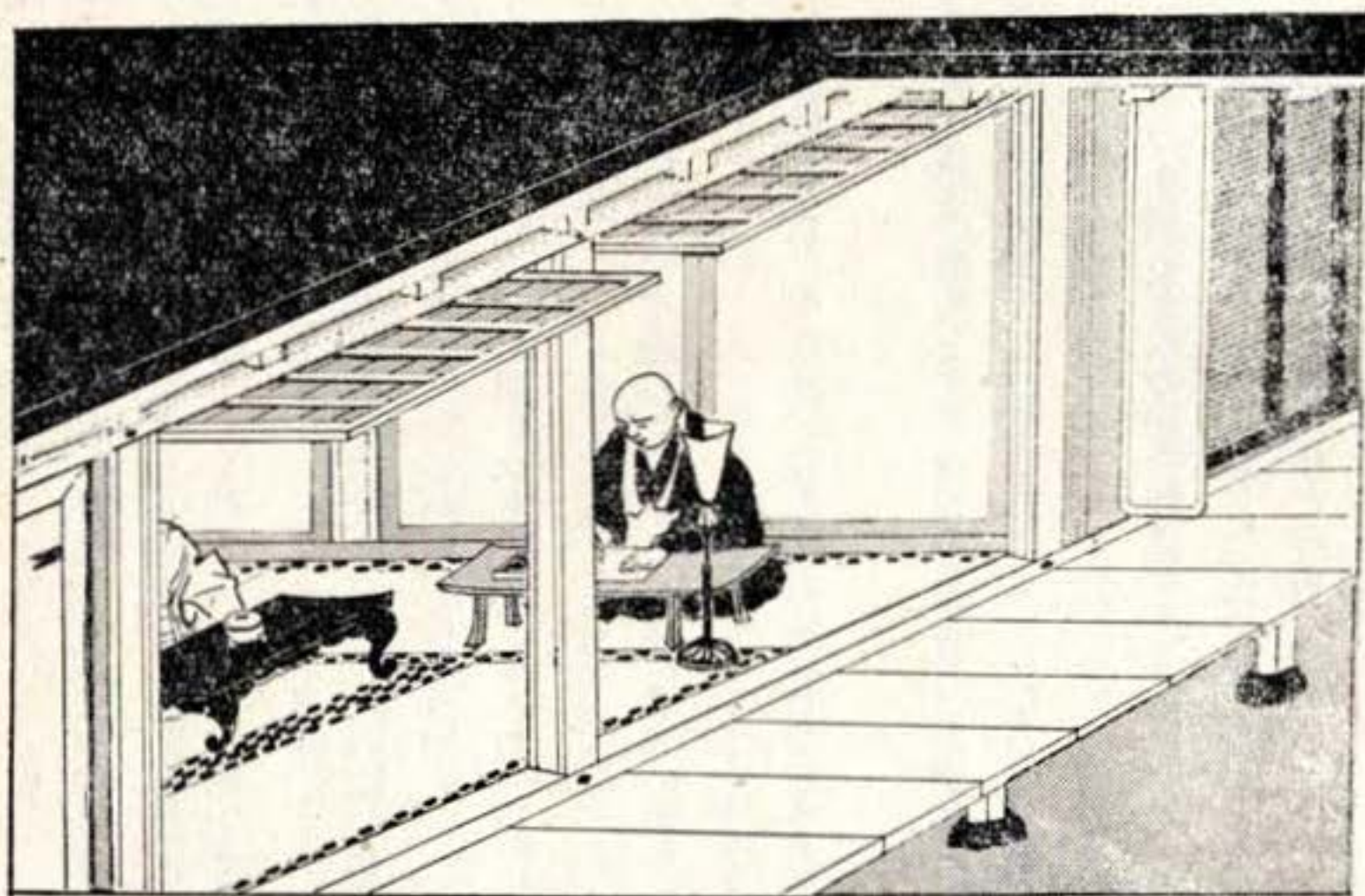
一時は容態が危ぶまれ、弟子達の顔も闇かったが、信空、感西初め源智等弟子たちの心のこもる看病に、七月下旬に至って漸く健康

は回復し平癒された。

ところが、その後は草庵にとちこもって、別請にも何処へも赴かれぬようになった。

毎月受戒のため赴かれていた月輪殿へも、高弟証空をして代理として参ぜしめていた。

兼実にとつては、家柄の出身であり、学問もあって高足とはいへ、証空では物足りなく思われたのか、藤右衛門尉重經を使とし



て、

「浄土の法門年頃お教えを承り居りますが、身不敏にして心腑に収め難き点、尚多くございます故、願くば、その要文を記し賜りたいと存じます。さすれば御面談の代りともなり、且つは後の世の御かたみにも備えることが出来まする」

と法語の遺述を乞い願わしめた。

或はこうも思われる。兼実は公卿中でも最も古典に通じた博学者であつただけ、念仏をそのままに信ずるまでに徹することが出来ないで、心に尚疑いがあり、信ずるには先づ論拠と故実を示されたいと懇願したのではあるまいか。

兼実のこの懇命をきくと、上人は暫く思案の容子であつたが、やああって、

「公の御懇望に付いては、源空もいささか考えるところもございます。静かに思案仕て、何をか試み申しましよう」
との快諾に、

「早速の御承引殿下にも、ことの外御満足と存じます。上人かく仰せられたと申し上げれば、私も面目を施しまする」

重經は、勇みよるこんで辞し帰った。

やがて上人は一室に閉ちこもって他の弟子を入らしめず、安樂房に執筆せしめて一書の遺述にかかった。

安樂房は外記入道師秀の子で、天性美声で住運と共に礼讃の唱詠に巧み、能文であり学才に於ても群を抜んでていた。

「他見をはばかりて書くがよい」

上人の態度は、極めて鎮重であつた。

上人は経釈の要文を引き文義を選んで、安樂は筆受して文を綴つた。

この光榮とよろこびに胸ふくらまして筆受していたが、第三章に至つた時、彼はこう思うのであつた。

「弟子も多くある中で、自分が筆受の大役に選ばれたのは、畢竟自分は他の弟子より述作の点に秀でているからであらう」

つい自分の才能にうぬぼれの心が湧いたものか、信友の住蓮にささやいた。

このことが、上人の耳にもすぐ達したもののか、彼は執筆の席から排斥されてしまった。

驚いて上足の信空に訴えた。信空は、彼のために取りなそうと、上人の意を窺つた。

「未代の人々の念仏往生の龜鑑とする一書の選述に、いささかでも高慢心のある者には断じて筆をとらすことはまかりならぬ。執筆を止めさせたのは、この僧を救うがためである」

と厳しくいい放つて、名利心を戒め許されようとしなない。

安樂房に代つて真觀房感西が、記述の任に選ばれることとなつた。彼は安居院の聖覚と並び称せられたほどの名文家であつた。

病を押され、師弟心を一にして、昼も夜も心血を注いで孜々として勉め勵んだ。

かねてから腹案もあり構想をも練られていたものか、浄土の聖經を博く渉り、往生の要文を網羅して、金玉のような文字でつづつた

一書を四月下旬に至つて脱稿することが出来た。これぞ上下二巻の有名な選択集である。

浄土門の宝典となり、日本仏教史上に一新紀元を画することとなつたこの選択集は、仏教全体を研対し、当代の人間の機根を思い、教えの当否を考えて、捨てるべきを捨て選ぶべきを選んだものである。釈尊一代に説かれた教説に對して、日本は勿論、未だこれまでに中国に於てさえ行われ企てられなかつたような、判釈つまり取捨選択を大胆に且つ嚴然と加えたものであつた。

浄土の一門を何故に信ずるかの理由を述べ挙げ、その教理的根拠を明示し力説したものである。

これまで日本で信奉されている諸宗を一括し、聖道とし、これを下根の自分とは過ぎたる道とし、これらの旧仏教とは別に、弥陀の本願である念仏の行を選んで浄土宗というものを新たに打ち立てたのである。

思索的な觀念の念仏ではなしに、憶念ではなしに、未法未代の人々には、ただ口称の念仏によつて救われるという選択本願としての念仏が明確にされ力強く主張されたのである。

ただ南無阿弥陀仏と口に称えることのみが、弥陀の本意にそうものであつて、なぜ釈迦も弥陀も雑多な善根行を捨て、ただ念仏の一行のみを選んだかの一宗の根本理念が、委しく意をつくして論究されている。諸宗との妥協をゆるさないで、念仏専修の理由を明瞭に嚴然と述べ立てる結果、これまでの仏教に對してするどい批判が行われ、ひいては全然否定的な結論さえ現われて來たのである。

若し他宗の僧徒が、この書を見たならば譏謗を加え、或はそれのため念仏の弘通に妨害の起る憂が多分にあったので、それをおそれ、この書は公にせず、門弟の中でも僅かな高弟にのみひそかに示したといわれている。

五、

兼実は、上人に対して絶対的な帰依をささげていたが、建久二年九月廿九日、宜秋門院は上人を宮中に召され、戒師として御授戒なされた。門院は後鳥羽天皇の中宮で、兼実の第一息女任子である。兼実の北の方も、夫の感化によって浄土門に帰したのはいうまでもない。

敬虔な兼実は、先づ沐浴して身心を洗い清めて恒例の念仏を初めると、夫人も傍にあって共に念仏を唱え經を誦することゝ屢々であった。

日頃兼実は、才白（腹膜炎）という持病に悩まされていたので、医師の時成が参じて灸の治療に当たっていたが、更に兼実にとっては、戒を受け念仏を唱えることは精神的な治療でもあったらしい。實際、受戒には邪氣や病氣を壊う大きな効驗もあったのであった。

それ故、夫人も病悩あって危急の時には、上人を請じて授戒している。

正治二年九月廿日の夜半から夫人は、急に病悩起って危急に及ぶ程であった。翌日は更に重くなったが、其の後軽快に向った。

ところが卅日に再発していよいよ重態となったので、上人を招い

て授戒すると、忽ち快方に向った。

兼実は、よほどうれしく有り難く思ったのか、

「其の驗しあり、尤も貰ふべし、貰ふべし」

と畏敬の言葉を、その日の日記（玉葉）に記している。

更に、十月一日二日と、夫人は重ねて戒を受けている。

戒徳高く、清浄な梵行をいとなんでいた上人には、重態な患者を平癒させるような不思議な靈力さえあったことが伺われる。

兼実は三十八の時、頼朝の支持の下に廚堂の主班となって以来、凡そ十年間、為政者として活潑な活動をなし、廃れたるを起し治め、一意善政を施し日頃の抱負の実現を計っていたが、事志と違ふことも多かった。

いつの世になっても、権力争いというものはつきないものである。殊に官位と勢力とは、この頃の公卿社会の競望したものである。

天下平穩に見える頼朝の幕府政治の治下にあっても、宮廷貴族の中にあっては、反鎌倉派があつたえず暗躍を試みていた。義経と行家に、頼朝追討の院宣を賜つたと噂されたのもこのためである。この時、極力反対してその非を唱えたのは兼実である。

兼実が関白になつても、これまで関白の職にあった甥の近衛基通との確執は、依然として消えない。

基通は、清盛の支持によって関白となつたが、清盛なきにも、後白河法皇の御寵愛を一身に蒙っていた。彼を極力支持していたのは朝廷にあって、断然重きをなしていた策謀家の源通親である。村上

源氏の通親は才器縱横で、驚くべき政治的手腕に長じた人物であった。後白河法皇の院政時代から兼実と全く相反する立場をとって、権力の競争をして来たものである。その上、彼の味方として、女ながらたえず君側にあって権勢を振っている高階栄子丹後局がいた。

彼等は院の旧臣を糾合し、兼実の立場を漸次孤立せしめ、終に失脚せしめてしまった。

ここに建久六年の暮、十一月廿五日、四十八才の時、兼実は関白並に氏の長者を辞するのやむなきに至った。

累は一族に及んで、天台座主として、比叡一山を統べていた兼実の弟、玆鎮も座主一切の官職を辞して籠居してしまった。

後鳥羽天皇の中宮である宜秋門院も、兼実の娘であるため、宮中を出でられてしまった。兼実の後へ前の関白基通が摂政となり、やがて関白となり、通親は大臣となり、通親一派の梶井門跡承仁法親王が座主を継がれた。兼実一家が廟堂から完全に退けられて後は、通親の勢力は圧倒的となつて行つた。

それ以来失意の状態にあつた兼実は、正治元年頼朝の急逝に遭い、世の無常を感じてか二年後、建仁二年正月廿八日、月輪殿に上人を招じて出家して円証と号した。兼実五十四才の時である。前年の十月十七日には、宜秋門院も父のすすめによって上人を戒師として廿九才の若さで御出家を遂げられている。定家の日記明月記によると、門院は有髪のままの出家であつたらしい。

兼実は、専修念仏に徹しようとして出家したのであるまいか。政治的権力のたよりなさ、現世に於ける頸門榮幸を望む空しさより、

弥陀の救いの中に、大きなよりどころを見い出そうとしたのではあるまいか、そうして、見えざる一脈の生々たる大生命を身に感じ、如来の本願力の中に生きる大きなよろこびを見い出すことが出来たのではあるまいか。

さればこそ、兼実の上人への師依の深さは、玆鎮が、後年巻き起つた上人配流のことが兼実の心痛の種となり、なげきの果て病となり、それが薨去の原因となつたと、愚管抄に述べているほど絶対的なものとなつたことと思はれるのである。

(了)

朝のことば

さとり of 樂しみを求めんには、まさ に 聖の法を学ぶべし、衣も食とは命を支うれば足り、そのよしあしは各々得るによるのみ。されど、人みな今日、朝に各々六念をば称えたまえ。

勸募日記

(二)

真理運動本部の神田寺、友松円諦氏の片腕となつて副主管をつとめ、現代人にアッピールする伝道法は周知の事実である。

「宗教人の生命は伝道である」といわれる。自分が信仰に生きて宗教者としての自覚にたちかえったとき、信法の悦びを他に伝えようという意欲がおのづから湧いてくる。その伝道は純粹なものであって、それによっておのれの利害打算を求めるのではない。唯、信仰に生きるよろこびと、法悦の感動を一人でも多くの人々に伝えることによって、その人の心に慰安をあたえ、社会の浄化をはかり、やがて世界人類の悲願である淨仏国土成就衆生を実現せんことを希うのである。その意味からして宗教者なるものは、片ときも伝道を怠ってはならない。

年友松師を彷彿させるものがある。殊に世の知識人、青年層には人気を博している。自坊円通寺も復興なり、布教の余暇を惜しんでの勉強振りは大したもの、師のごとき布教師の後続をねがって止まない。

宗門の数多くの布教師のなか、新しいタイプの布教師をもとむるならば、まず後藤真雄師をあげることができる。後藤師は本誌にも御執筆をいただいたのでお馴染みではあるが、

伝道といつても、高座にのぼって一席弁ずることのみが伝道教化ではない。一言もなくとも、その人の生活態度そのまが伝道であり、布教でもある。それを感じさせるのは、広本徹隆師である。一見地味にみえる師ではあるが、一面なかなか精悍なところがある。法性寺の玄関に立つと、香の薫りにまじって、新しい木のかおりがぶんぶんとう。立派に完成した庫裡を拝見して、住職によせる人望と、行届いた教化のすがたをうかがうことができた。

教化といえ、その場は縦横にあたえられ

ているはずである。寺院ばかりが教化の場ではない。勤務していればその職場が教化の場であり、まして教師として勤務しているものは、生徒の教育即教化と心得べきであらう。その点、若さと自信をもって忠実に与えられた職務を履行している人がいる。その人は、倉俣茲師である。玄信寺住職として又、近くの中学校教師として、二足のわらじをきちんと履いている。寺の檀家だけの限られた教化の場だけでなく、将来ある青少年をも対称として教化できることに幸せとそして責務の重大さを感じながら、日々つとめている姿は頼もしい。好漢の前途、自重して発展あらんことを祈りたい。

玄信寺をあとに、正覚寺を訪れた。住職鈴木義宏師。聞しにまさる明朗闊達で、その人柄は円満で町内会長をはじめ町の色々の世話をされており、地元の信任も篤い。学生時代から人気のあった方と聞くが、その人に愛される性格はいま尚変りがない。

私たちが、近世において高僧と仰ぐその第一人者は、何といつても福田行誠上人であろう。その上人縁りの地、清澄の本誓寺は戦災

に遇ったが、住職福田行紀師の骨身惜しまぬ努力が実って、モダンな近代建築の本堂が完成した。鉄筋コンクリートで、内部は、内陣が畳、外陣は椅子式で、照明効果も充分な明るい感覚である。時代相応の道場を建立された、福田師の今後の活躍が期待される。

深川を一巡して感じたことは、どちらの御寺院を訪れても内外共に整理され、それに住職はみない意味で意欲的な逞しさをもってゐることである。革新的なノロシは深川よりといわれた往年の意気も、真近かにみられることであろう。

深川から、江戸川に移って、最初に訪れたのは、源法寺である。広々とした境内、庭木の行届いた手入れ等に感心して玄関近くにくいたると、そこには又、見事な菊の鉢が三十程あった。奥様に伺うと、御住職は園芸の御趣味とのこと。昨年十一月の浅草寺落慶記念の開帳に催された、菊展には、見事入賞して自転車を獲得された由。住職北川俊嶺師は浄土宗議会議員の要職にあり、名実共に立派な方である。

無欲恬淡とした風ボウは、自然を愛し、草

木をいつくしんでおのづと創りあげられたものか。語る態度は大人そのものである。

深川の動に対して、江戸川は静の感がある。いづこを訪れても、自然環境は恵まれてゐる。緑の木立ちに囲まれて聳える伽藍、完備した庫裡、そして太子堂等その配置は整然としてゐる。その山門脇には幼稚園が開設されている。これは、江戸川の明福寺、住職は福井豊信師である。仏像を結ぶには幼児期よりと教化の一端として幼稚園をはじめられたという。その名もルンビニー幼稚園。歴史はさほどに古くはないが、福井師の園児を愛し導く情熱に、母の会も協力して園舎も面目を一新、毎日可愛い歌声が響いている。

幼稚園といえ、仲台院に於ても経営している。住職は堀井憲明師、新進気鋭の師は未だ独身、御令弟と力を併せて、寺門の興隆にそして社会事業の一環としての幼稚園にと、ひたぶるな情熱を傾けている。人を魅する力は、老いとか若さということではない。自づからの道をひらき、その仕事に向って一心に情熱をもやしつづけている姿に、人々の心は魅せられるのである。美しい兄弟愛が形造つ

てゆくいくたの事業は、将来必ずや実を結び発展していくことであろう。

私たち一行は、江戸川をあとに、猿江の重願寺にまかりでた。本誌の古い愛読者であり、今も変らぬ絶大な御賛助をいただいている。住職大谷玄瑞師、色々会のことについて、厳しい御批判をいただくが、その底には温かい思いやりと、本誌を育てようという愛情がにじんでいる。別格だけに寺の内外は壯觀をきわめ隆々たるものを感じる。法嗣旭雄師は、現在正大大学院にて勉学中、将来に寄せる期待は大きい。

(A・M)

— 聖 句 —

経があつても、読まなければ
経の垢、家があつても破れて
繕いをしなければ家の垢。
怠るのは身の垢である。

支部通信

東京	伝通院(三五名) 代表者 大河内隆弘	東京	西福寺(十五名) 代表者 成田 良穂	東京	講安寺(三十名) 代表者 池田 立基	東京	雲光院(二十名) 代表者 服部 覚善	東京	重願寺(二十名) 代表者 大谷 玄瑞	東京	心行寺(十名) 代表者 鈴木 在念	東京	明福寺(十名) 代表者 福井 豊信	東京	長專院(五名) 代表者 正木 実乗	東京	法性寺(五名) 代表者 広本 徹隆	東京	円通寺(五名) 代表者 後藤 真雄	東京	正覚院(十名) 代表者 稲田 稔界	東京	靈巖寺(五名) 代表者 伊藤 智源	東京	正覚寺(五名) 代表者 鈴木 義宏
東京	浄心寺(十名) 代表者 小池 政雄	東京	厳浄院(五名) 代表者 鈴木 俊善	東京	行安寺(十名) 代表者 鈴木 靈孝	東京	本誓寺(五名) 代表者 福田 行紀	東京	昌清寺(五名) 代表者 服部 仙順	東京	玄信寺(五名) 代表者 倉 侃 茲	東京	仲台院(十名) 代表者 堀江 憲明	東京	円勝寺(五名) 代表者 望月 信道	東京	源法寺(五名) 代表者 北川 俊嶺	東京	長善寺(五名) 代表者 山本 貫瑞	東京	正受院(五名) 代表者 原口 徳正	東京	浄土寺(十名) 代表者 阿川 貫達	東京	梅窓院(五名) 代表者 中島 真孝
東京	善光寺(六名) 代表者 小林 観導	東京	龍泉寺(五名) 代表者 伊東 芳瑞	埼玉	円心寺(二五名) 代表者 石田 正信	茨城	常林寺(一五名)	大阪	大光寺(二十名) 代表者 三枝樹正道	広島	浄国寺(二五名)	京都	家政学園(十二名) 代表者 田村	福井	善導寺(三十名) 代表者 大門 俊我	長崎	専念寺(二十名)	長野	呈蓮寺(五名) 代表者 横内 浄音	長野	善法寺(五名) 代表者 石川 清美	青森	青岩寺(七名)		

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一力年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土 三月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十四年二月廿五日 印刷

昭和三十四年三月一日 発行

定価 五十円

編集人 竹 中 信 常

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

大正大学

東京都豊島区
西巣鴨4丁目

電話 (982)
0894. 0995. 0996

特色

一、西と東、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従つて穩健中正、操守高き学生を育成することを目標とし、教授凡てが身を以て指導に當つてゐる。

二、学生は、入学と同時に専攻別による十三の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

文学部Ⅱ国文学、英文学、史学、西洋哲学
宗教学、中国学、社会学、社会学、社会事業の八

専攻
仏教学部Ⅱ仏教学、梵文学、天台学、真言学、浄土学の五専攻

修士コースⅡ仏教学、宗教学、国文学
博士コースⅡ仏教学、宗教学、国文学

募集人員

学部一年Ⅱ(二〇〇名)
二・三年(若干名)
大学院 修士(四〇名)
博士(十三名)

試験科目

学部一年Ⅱ国語ハ漢文を含む。社会ハ社会・世界史・日本史・人文地理より一科目選択。外国語ハ英語・独語・仏語より一科目選択。学部二・三年編入・大学院(修士・博士共)Ⅱ学科Ⅱ論文・外国語ハ英語・独語・仏語・中国語より一科目選択。但し博士コースは外国語二科目選択。

試験期日

三月二十七日(金)。二十八日(土)
願書受付期間(学部大学院共)二月二日―三月二十五日

○詳細は入学案内を参照のこと。
○入学案内書類は三十円封入の上、庶務課へ

特典

。中学一級、高等学校二級(国需、英語社会、宗教、書道)の教員免許状取得。社会福祉主事の資格取得

東京高等保育学校長
駒沢大学文学部講師

内山憲尙著

B6判一六〇頁

予価 一八〇円

送料 三〇円

仏教保育二十章

―図解・仏教保育の理論と実際―

内山先生は東京高等保育学校、聖美幼稚園などの経営にあたり、多年、実際の仏教保育を通じて、指導理念をつかみ、それを実践されてきた方であり、本書の執筆は、六・七年前より計画され、長い間資料をあつめ想を練つた上、このほど脱稿をみたものであり、幼稚園、保育所が数においては老大なものになつたにもかかわらず、適切な保育指導書を欠いている今日、まことに時宜をえたものと思ひます。何卒、御一読をおねがい申し上げます。

(付録)

- 一、幼稚園関係法規
教育基本法、学校教育法抄、設置基準法
- 二、保育所関係法規
児童憲章、児童福祉法

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)

申込先 青山書院

振替東京九九三〇三番